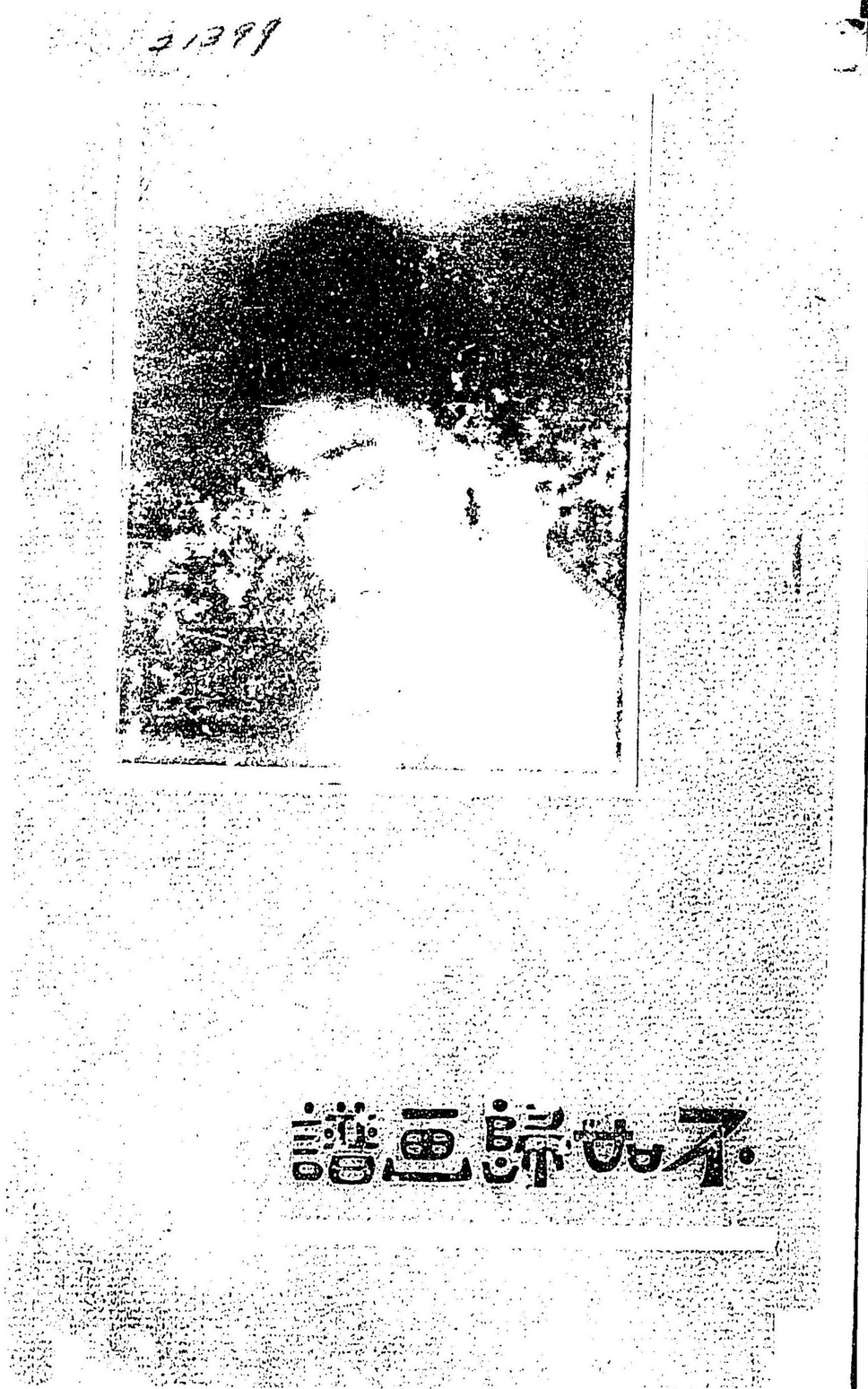
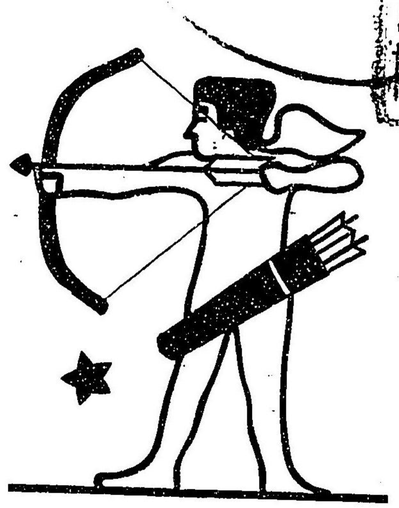
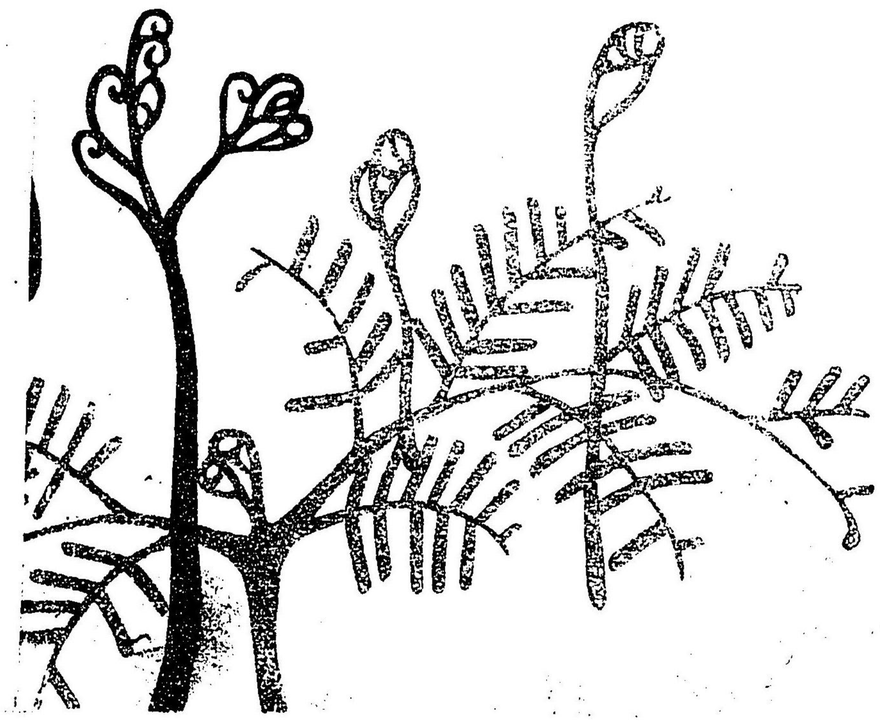


7. 鶴亀鶴亀

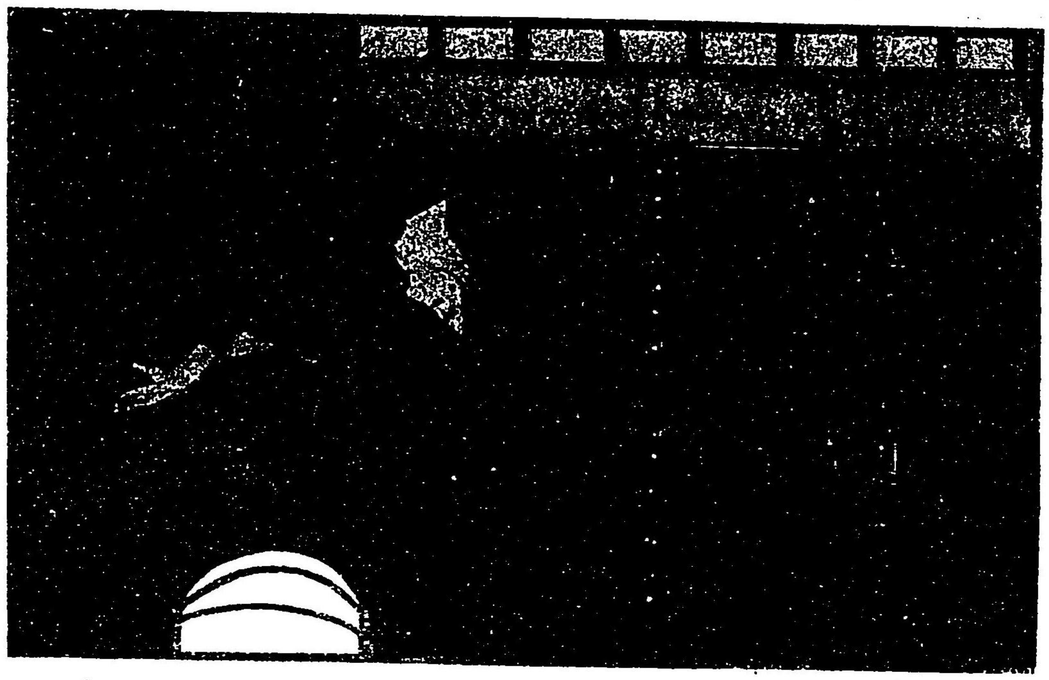
329-82



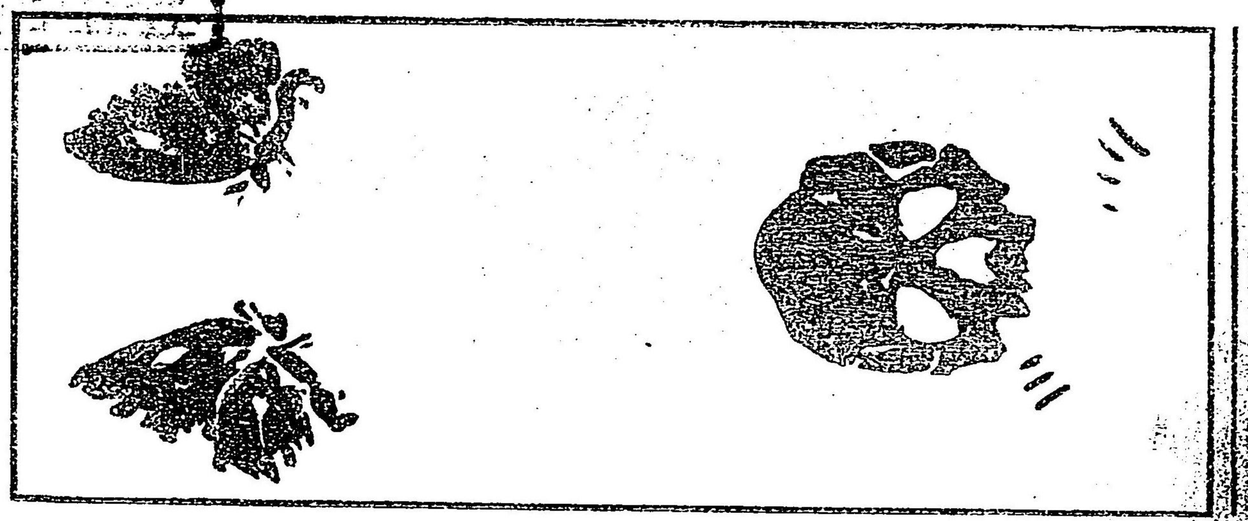


昭和
44. 1. 20
内交

原著者　德富蘆花氏
編書裝幀　中澤弘光氏
木版彫刻　伊上凡骨氏
表紙四色版　古作勝之助氏
口絵見返印刷　中村三次郎氏
本文挿畫印刷　大江幸吉氏
製本　高崎製本所

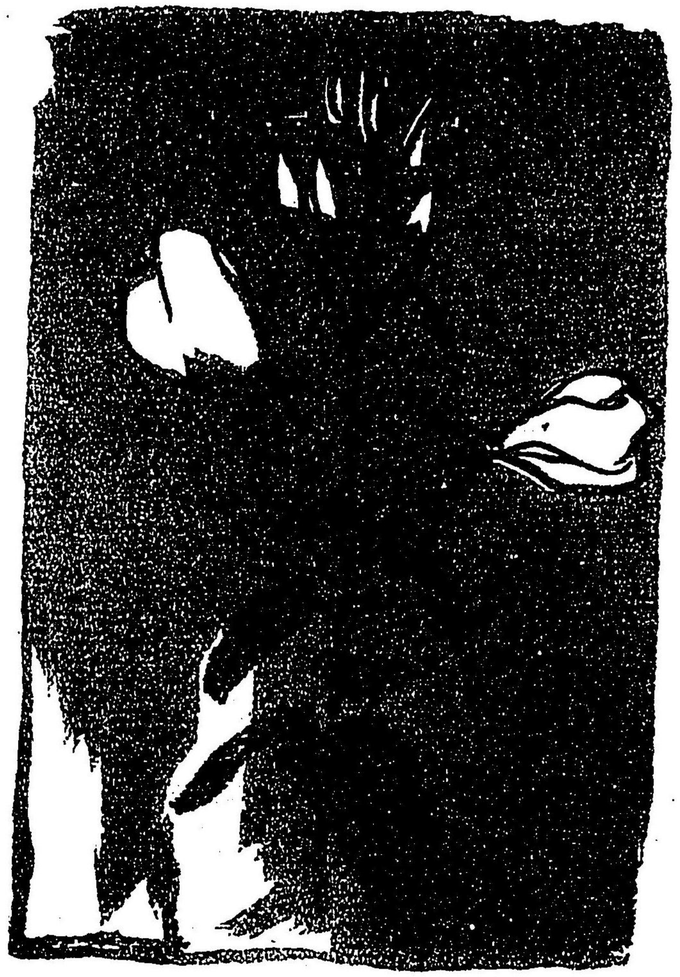


(0)

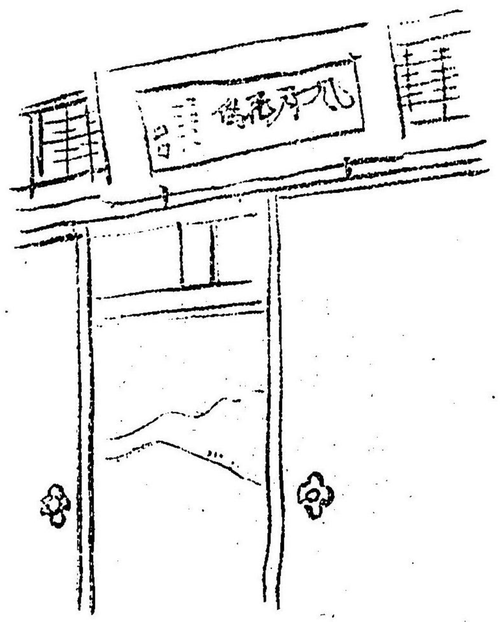


上州伊香保千明の三階の障子開きて、夕景色を眺むる婦人。年は十八九。品好き丸髷に結ひて、草色の紐つけし小紋縮緬の被布を着たり。

色白の細面、眉の間やゝ蹙りて、頬のあたりの肉寒げなるが、斑と云はば疵なれど、瘠形のすらりと静淑らしき人品。此れや北風に一輪勁きを誇る梅花にあらず、また霞の春に胡蝶と化けて飛ぶ櫻の花にもあらで、夏の夕闇にほのかに匂ふ月見草、と品定めもしつ可き婦人。



春の日脚の西に傾きて、遠くは日光、足尾、越後境の山々、近くは、小野子、子持、赤城の峰々、入日を浴びて花やかに夕栄すれば、つゐ下の板襖れて啞々と飛び行く烏の聲までも金色に聞ゆる時、雲一片茫々然と赤城の背より浮び出でたり。三階の婦人は、座ろ[illegible]行方を瞻視りぬ。

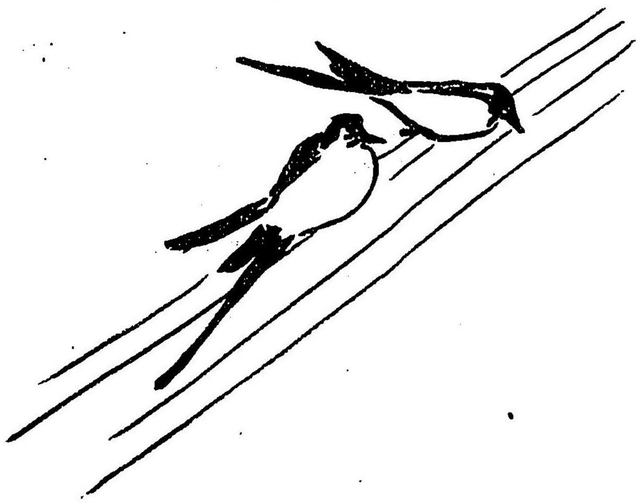


兩手優かにかき抱きつ可きふつくりと可愛氣なる雲は、徐ろに赤城の嶺を離れて、遮る物もなき大空を相並むで金の蝶の如く閃きつゝ、優々として足尾の方へ流れしが、やがて日落ちて黄昏寒き風の立つまゝに、二片の雲今は薔薇色に褪ひつゝ、上下に吹き離され、漸次に暮るゝ夕空を別れ〳〵に辿ると見しも暫時、下なるはいよ〳〵細りて何時しか影も殘らず消ゆれば、殘れる一片は更に灰色に褪ひて朦乎と空にさまよひしが、果ては山も空も唯一色に暮れて、三階に立つ婦人の顔のみぞ夕闇に白かりける。

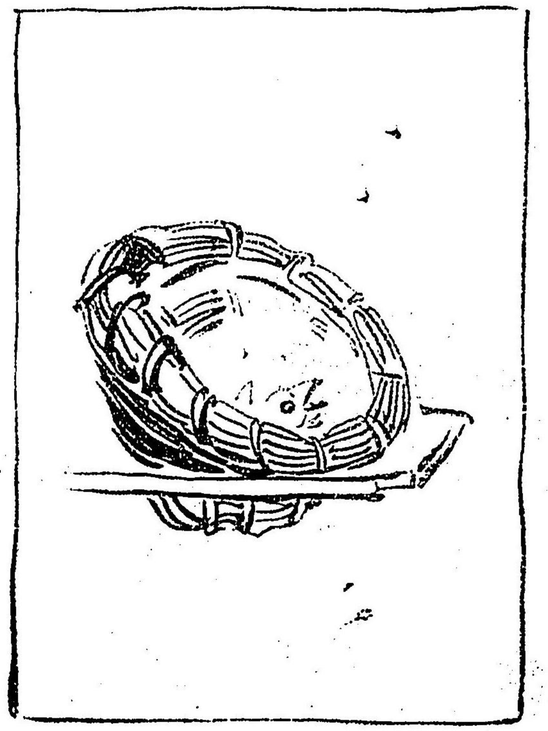
「おや、お父上の御手紙――早く御歸りなされば宜に！」

と丸髷の婦人はさも懷かし氣に表書を打かへし見る。

「あの、殿樣の御狀で――早く伺ひたいものでムいますね。おほゝゝ、屹度また面白いことを仰有つてゞムいませう」

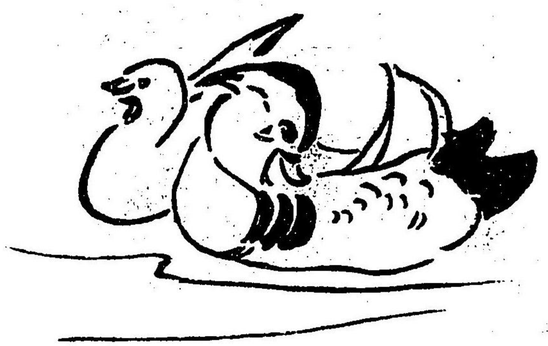


「本當に冷えますこと！東京とは餘程違ひますでムいますねエ」
「五月に櫻が咲いて居る位だからねエ。姥や、もつと此方へお寄りな」
「有り難うムいます」云ひつゝ老女はつく〳〵顔打眺め「嘘の樣でムいますねエ。斯樣に御丸髷に御結ひ遊ばして、整然と坐つて御居遊ばのすを見ますと、ばあやが御育て申上げた御方樣とは思へませんでムいますよ。先奥樣が御亡なり遊ばした時、ばあやに負されて、母樣母樣ッて御泣き遊ばしたのは、昨日の樣でムいますがねエ」はら〳〵と落涙し「御輿入の時も、ばあやはねエあなた、彼御立涙な御容子を先奥樣が御覽遊ばしたら、如何樣に御嬉しかつたらうと思ひましてねエ」と袷袢の袖引出して眼を拭ふ。



やゝありて姥は面を上げつ。

「御免遊ばせ、また此様な事を。おほゝゝ年が寄ると愚癡つぽくなりましてねエ。おほゝゝゝ、御嬢――奥様も此までは色々御苦勞も遊ばしましたねエ。本當によく御辛抱遊ばしましたよ。最早最早此れからは御目出度事ばかりでムいますよ、旦那様は彼通り御やさしい御方様――」



「やあ、草臥れた、草臥れた」

足袋草鞋脱ぎ棄てゝ、出迎ふ二人に一寸會釋しながら、廊下に上りて來し二十三四の洋服の男、提燈持ちし若い者を見返りて、

「いや、御苦勞、御苦勞。其花は、面倒だが、湯に浸けて置いて貰はうか」

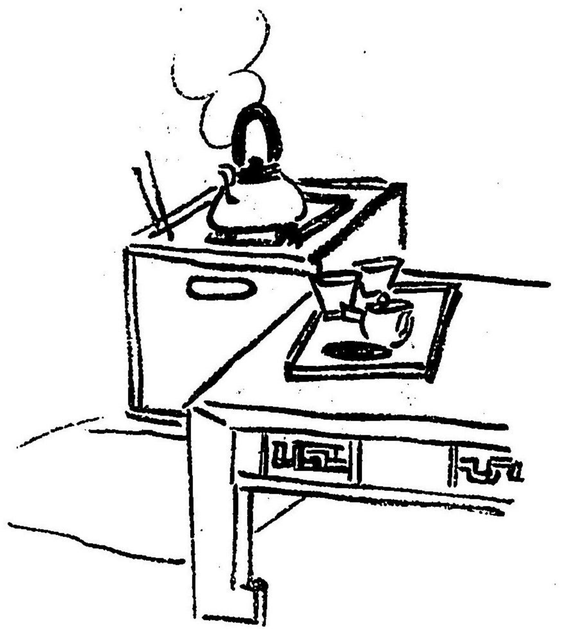
「まあ、奇麗！」

「本當にまあ、奇麗な躑躅でムいますこと！旦那様、何處で御採り遊ばしました？」

「奇麗だらう。そら、黄色いやつもある。葉が石楠に似るだらう。明朝浪さんに活て貰はうと思つて、折つて來たんだ。……どれ、すぐ湯に入つて來やうか」

「本當に旦那様は御活潑でいらつしやいますこと！如何しても軍人の御方様は御違ひ遊ばしますね、エ、奥様」

奥様は丁寧に畳みし外套を寄と接吻して茶碗はかけつつ、たゞ含笑みて無言なり。



階段も躍と上る足音障子の外に絶えて、「あゝ好心地！」と入り來る先刻の壯夫。

「おや、旦那樣最早御上り遊ばして？」

「男だもの。あはゝゝゝ」と快よく笑ひながら、妻がきまり惡げに彼る大縞の褞袍引かけて、「失敬」と座蒲團の上に胡座をかき、兩手に頬を撫でぬ。栗蟲の樣に肥えし五分刈頭の、日にやけし顏は宛ながら熟せる桃の如く、眉濃く眼いきゝと、鼻下に薄すり毛蟲程の髭は見えながら、まだ何處やらに幼な顏の殘りて、合笑まる可き男な

「良人、御手紙が」

「あ、乃男だな」

壯夫は一寸座樣を直して、封を切り、中を出せば落つる別封。

「此は浪さんのだ――ふむ、御變りもないと見える……はゝゝゝ滑稽を仰有るな……御話を聞く樣だ」笑を含むで讀み終へし手紙を卷いて側に置く。

「卿にもよろしく。場所が變るから、持病の起らぬやうに用心おしつて仰有つてよ」と「浪さん」は饌を運べる老女を顧みつ。

「まあ、左樣でムいますか、有り難う存じます」

「併し相馬が嶽の眺望は好かつたよ。浪さんに見せたい位だ。一方は茫々たる平原さ、利根が遥かに流れてね。一方は所謂山又山さ、其上から富士がちよつぼり覗いてるなんぞは頗る妙だ。歌でも詠めたら、一とつ人麿と腕比べをしてやる處だつた。あはゝゝゝ。そら今一とつお代りだ」

「其樣に景色が宜うムいますの。行つて見たうムいましたこと！」

「ふゝゝゝ。浪さんが上れたら、金鵄勳章をあげるよ。其あ危嶮い山だ、鐵鎖が十本も下つてるのを、つたつて上るのだからね。僕なんざ江田島で鍛い上げた體で、今でもすはと云ふと橋でも綱でもぶら下る男だから、何でもないがね、浪さんなんざ東京の土踏んだ事もあるまい」

「まあ、彼樣な事を」嫣然顏を赧らめ、「此れでも學校では體操も致しましたし――」

「ふゝゝゝ。華族女學校の體操ぢや仕方がない。さうさう、何時だつけ、參觀に行つたら、琴だか何だかコロン〳〵鳴つてゝ、一方で『地球の上に國と云ふ國は』何とか歌ふと、女生が扇を持つて起つたり踞むだりぐるり廻つたりしとるから、踊の溫習かと思つたら、彼が體操さ！あはゝゝゝ」

「まあ。御口がお惡い！」

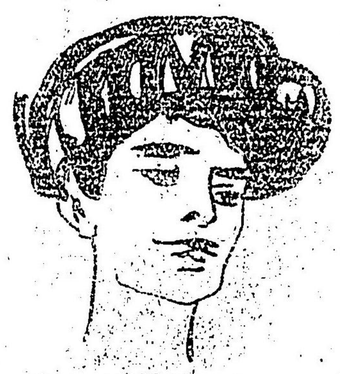
「さう〳〵。彼時山木の女と並むで、垂髪に結つて、あ
りあ何とか云つたつけ、葡萄色の袴はいて澄まして躍
つてたのは、たしか浪さんだつけ」
「ほゝゝゝ、彼樣な言を！あの山木さんを御存じでいら
つしやいますの？」

前回假に壯夫と云へるは、海軍少尉男爵川島武男と呼ばれ、此回良媒ありて陸軍中將子爵片岡毅とて名は海内に震へる將軍の長女浪子と目出度合巹の式を擧げしは、つい先月の事にて、こゝ暫時の暇を得たれば、新婦と其實家よりつけられし老女の幾を連れて四五日前伊香保に來りしなり。

浪子は八歳の年實母に別れぬ。八歳の昔なれば、母の容貌は歴々と覺えねど、始終笑を含みて居られしことゝ、臨終の其前に吾を臥床に呼びて、痩せ細りし手に吾が小さき掌を握りしめ「浪や、阿母は遠い所に行くからね、成人しくして、阿爺を大事にして、駒ちやんを可愛がつて遣らなければなりませんよ。今五六年……」と云ひさしてはら〳〵と涙を流し「阿母が在なくなつても阿母を記憶えて居るかい」と今は肩過ぎし吾黒髪の其頃はまだ總さりと額際まで剪り下げしをかい撫で〳〵し玉ひし事も記憶の底深く彫りて思ひ出ぬ日はあらざりき。

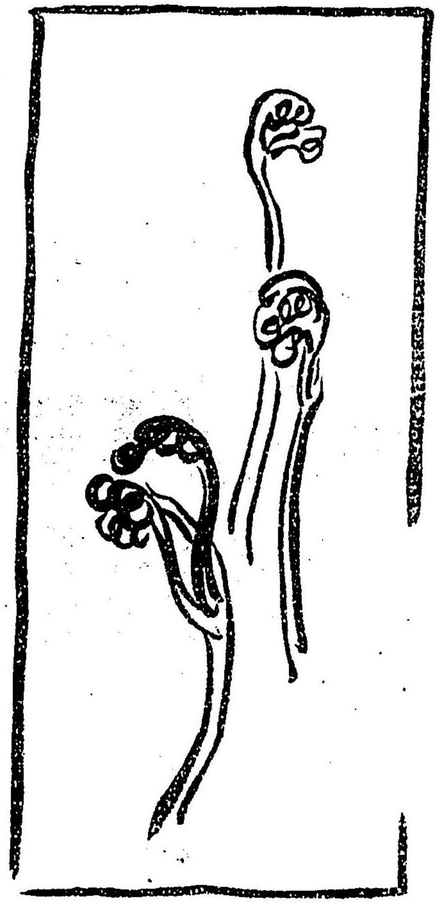
一年程過ぎて、今の母は來つ。其れより後は何も彼も變り果てたることになりぬ。先の母は歴としたる士の家より來しなれば、萬づ折目正しき風なりしが、其れにても彼の樣に仲好き御夫婦は珍らしと婢の言へるを聽けることもありし。今の母は矢張歴とした士の家から來りしなれど、早くより英國に留學して、男まさりの上に西洋風の染みしなれば、何事も先とは打て變りて、すべて先の母の名殘と覺ゆるをば宛ながら打消す樣に片端より改めぬ。父に對しても事毎に遠慮もなく語らひ論ずるを、父は笑ひて聞き流し「好々、乃公が負ちや、負ちや」と言はるゝが常なれど、或時極氣に入りの副官、難波と云へるを相手の晩酌に、母も來りて座に居しが、父はちろりと母を見てから〳〵と笑ひながら「喃難波君、學問の出來る細君は持つもんぢやごわはん、いや散々な目に遭はされますぞ、あはゝゝ」と云はれしとか

慈母に別れし浪子の哀は子供には似ず深かりしも、後の日だに照りたらば苦もなく育つ筈なりき。束髪に結び、側へ寄れば香水の香の立ち迷ふ、眼少し釣りて口大きなる今の母を初めて見し時は、流石に少したぢろぎつるも、人なつこき浪子は此母君にだに慕ひ寄る可かりしに、継母は吾れから挾む一念に可愛ゆき兒をば押隔てつ。世馴れぬ吾儘者の、學問の誇り、邪推、嫉妬さへ手傳ひて、まだ八つ九つの可愛兒を心ある大人なんどの樣に相手にするより、此方は取つく島もなく、寒さ淋しさは心に浸みぬ。



唯父こそは、父こそは渾身愛に滿ちたれど、其父中將すらも流石に母の前をばかねらるゝ、其も思へば慈愛の一つなり。されば母の前では餘儀なく叱りて、陰へ廻れば言葉少なく情深くいたはる父の人知らぬ苦心、怜悧き浪子は十分に酌んで、あゝ嬉しい忝じけない、何卒身を粉にしても父上の御爲にと心に思はるれど、氣がつく程にすれば、母は自身の領分に蹈み込まれたる樣に氣を惡くするが辛く、光を韜みて言寡に氣もつかぬ體に控へ目にして居れば、却て意地惡のやれ鈍物のと思はれ言はるゝも情無し。

伊香保より水澤の觀音まで一里あまりの間は、一條の道、蛇の如く禿山の中腹に沿ふてうねり、唯二ヶ所ばかり山の裂目の谷をなせるに陷りてまた這ひ上れる外は、眼をねむりても行かる可き道なり。



下は赤城より上毛の平原を見晴らしつ。此處等あたりは一面の草原なれば、春の頃は野焼の痕の黒める土より、さまゝの草萱萩桔梗女郎花の若芽など、生え出でゝ毛氈を敷けるが如く、美しき草花其間に咲き亂れ、綿帽子着た錢苔、ひよろりとした蕨、此處も其處もたちて、一たび此處に下り立たば春の日の永きも忘る可き所なり。

武男夫婦は、今日の晴を蹶狩すとて、姥の幾と宿の女中を一人伴れて、午食後より此處に來つ。早や一とし きり採りあるきて、少し草臥が來しと見え、女中に持たせし毛布を草の軟らかなる處に敷かせて、武男は靴ばきのまゝごろりと横になり、浪子は麻裏草履を脱ぎ桃紅色の手巾にて二つ三つ膝のあたりを揩ひながらふわりと坐りて、

「おゝ軟か！勿體ない樣でムいますね」

「ほゝゝお嬢――あらまた、御免遊ばせ、お奥様の好い御顔色に御なり遊ばしましたこと！そして彼様に御唱歌なんぞ御歌ひ遊ばしましたのは、本當にお久し振りでムいますねエ」と幾は嬉し氣に浪子の横顔を覗く。

「除り歌つて何だか渇いて來たよ」

「御茶を持つて參りませんで」と女中は風呂敷解きて夏蜜柑、袋入りの乾菓子、折詰の卷鮓など取り出す。

「何、此があれば茶は入らんさ」と武男は衣兜よりナイフ取り出して、密柑を剝きながら「如何だい浪さん、僕の手際には驚いたらう」

「彼様な言を仰有るわ」ほんとにいつまでもしやること

「浪さん、草臥はしないか」

「否、些も今日は疲れませんの、わたくし此様に楽しいことは始めて！」

「遠洋航海なぞすると随分好い景色を見るが、併し此様な高い山の見晴はまた別だね。實に爽々するよ。そら其處の左の方に白い壁が閃閃するだらう。あれが來時に浪さんと晝飯を食つた澁川さ。それから今少此方の碧いリボンの様なのが利根川さ。彼が坂東太郎だ見えないだらう。それからあの、赤城の、斯うずうと垂とる、それ〳〵煙が見えとるだらう、あの下の方に何だかうちや〳〵してるね、彼が前橋さ。何？すつと向ふの銀の針の様なの？さう〳〵。彼は矢張利根の流だ。あゝもう先きは霞むで見えない。雨眼鏡を持つて來る處だつたねエ、浪さん。併し霞がかけて、先が明瞭しないのも却て面白いかも知れん」——

浪子は竊と武男の膝に手を投げて溜息つき

「何時までも斯して居たうムいますこと！」

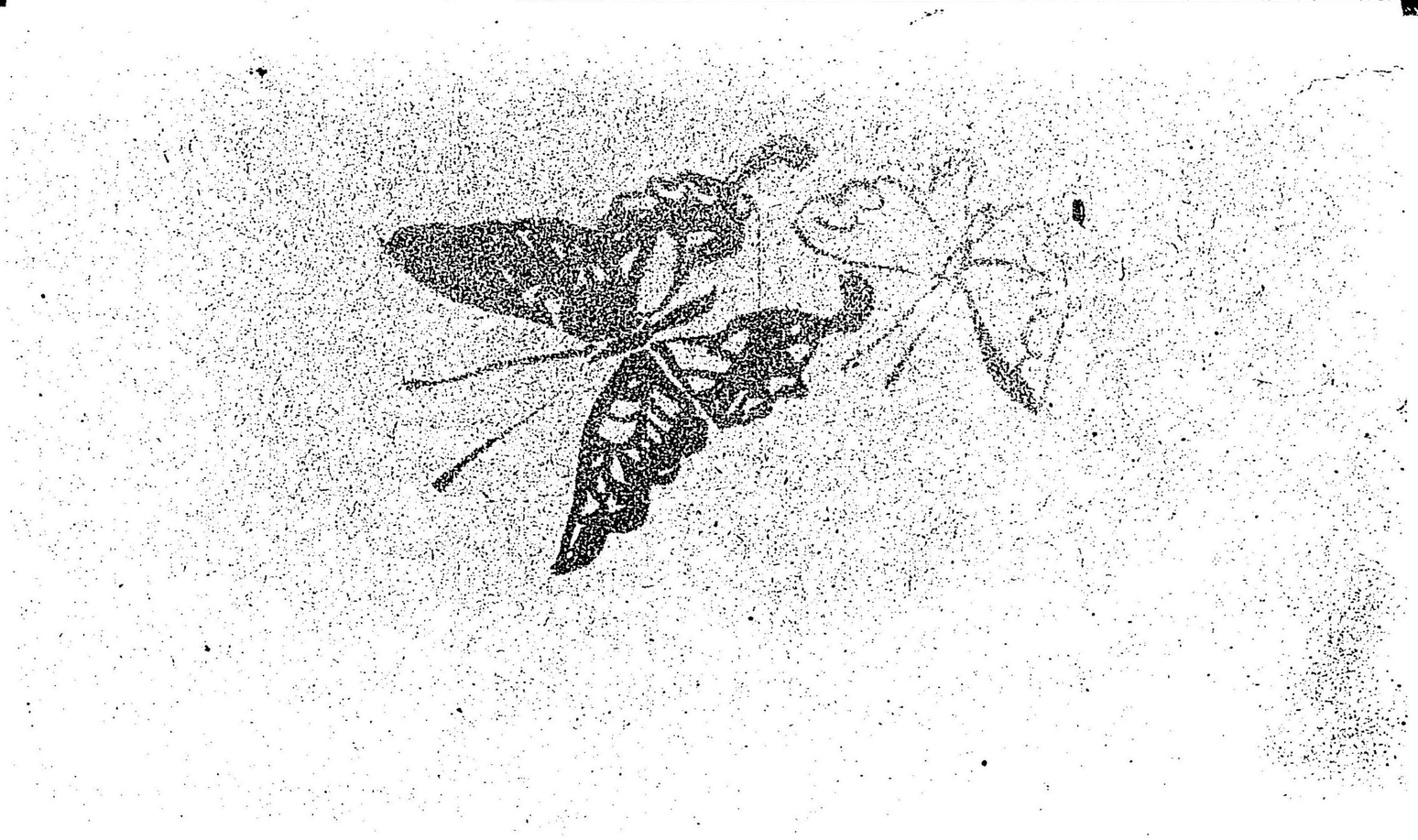
黄色の蝶二つ浪子の袖を掠めてひら〳〵と飛び行きし

あとより、さわ〳〵と草蹈む音して、帽子被りし影法

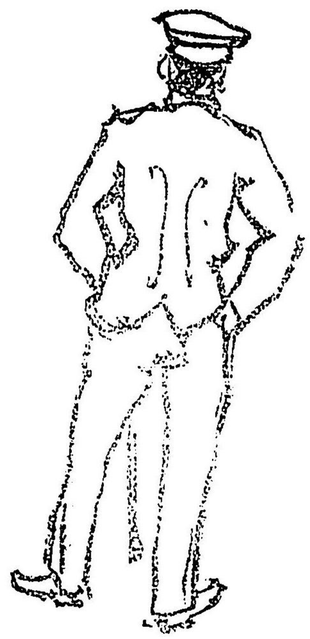
師突然に夫婦の眼前に落ち來りぬ。

「武男君」

「やあ！千々岩君か。如何して此處に？」



新來の客は二十六七にや。陸軍中尉の服を着たり。軍人には珍らしき色白の好男子。惜しきことには、口のあたり何處となく鄙じ氣なる處ありて、黒水晶の如き眼の光鋭く、見つめらるゝ人に不快の感を起さすが、疵なるべし。此は武男が從兄に當る千々岩安彦とて、當時參謀本部の下僚に居れど、腕利の聞えある男なり。



蛇に貧縁らるゝ栗鼠の今は是非なく顔を上げたり。

「何でムいます？」

「男爵に金、は矢張好いものですよ。へゝゝゝゝ、いや御目出度う」

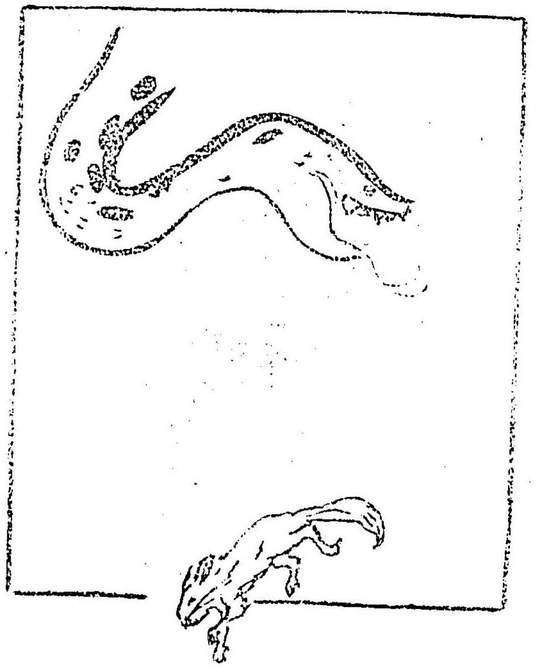
「何を仰有るのです？」

「へゝゝゝ、華族で、金があれば、馬鹿でも嫁に行く、金がなけりや如何様なに慕つても唾もひッかけん、ね、此れが當今の姫御前です。へゝゝゝ、浪子さんなンざ其様な事はないですがね」

浪子も流石に血相変へて屹と千々岩を睨みたり。

「何を仰有んンです。失敬な。今一度武男の目前で言つて御覧なさい。失敬な。男らしく父に相談もせずに、無禮千萬な絶書を吾に遣つたりなンぞ……最早此から決して容赦はしませぬ」

「何ですと？」千々岩の額は眞暗くなり來り、唇を噛むで、一歩二歩寄らむとす。



此上は結婚なり。猿猴のよく水に下るはつなげる手ありるが爲め、人の立身するはよき縁あるが爲めと、早くも知れる彼は、戸籍吏ならねども、某男爵は某侯爵の婿、某學士衆高等官は某伯の婿、某富豪は某伯の子息の養父にて、某侯の子息の妻も某富豪の女と暗に指を折りつゝ、早くも其處此處と配れる眼は片岡陸軍中將の家に注ぎぬ。

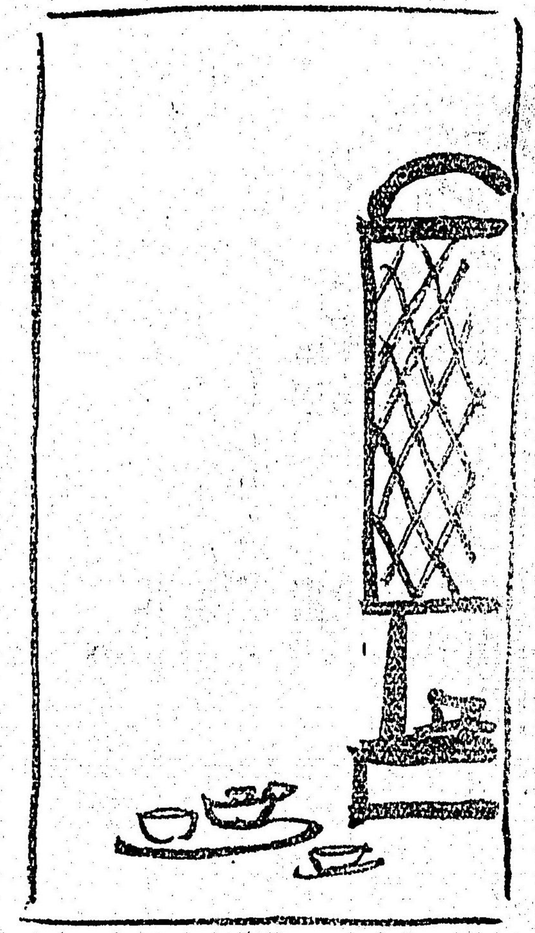
眼は直ちに第一の令嬢浪子を睨みぬ。

＊　＊　＊

千々岩はやがて一年ばかり機會を覗ひしが、今は待ちあぐみて或日宴會歸りの醉まぎれ、大膽にも一通の艶書二重封にして表書を女文字に、故らに郵便をかりて浪子に送りつ。

橋場の渡のほとりなる唯有る水涯の門に山木兵造別邸とあるを見すば、某の待合かと思はる可き家作の、加之青緑の彩しめやかに婀娜めきたる島田の障子に映るか、左もなくば紅の毛氈敷かれて花牌など落ち散るに相應しかる可き二階の一室に、わざと電燈の野暮を避けて例の和洋行燈を据ゑ、取り散らしたる盃盤の間に、胡座をかけるは千々岩と今一人の赤黒子は問ふまでもなき當家の主人山木兵造なる可し。

「いや陸軍にも、分つた人もあるが、實に話の出來ん男も居るね。去年だつた、師團に服を納めるンで、例の筆法でまあ大概は無事に通つたのはよかつたが。あら何とか云つたつけ、赤髭の大佐だつたがな、其奴が何の彼の難癖つけて困るから、番頭をやつて例の菓子箱を出すと、馬鹿奴、賄賂なんぞ取るものか、軍人の體面に關するなんて威張つて、到頭のつまりあ菓子箱を蹴飛ばしたと思ひなさい。例の上層が干菓子で、下が銀貨だから、たまらないさ。紅葉が散る雪が降る、座敷中——の雨だらけ。すると其奴めいよ〳〵腹立てやがつて、汚らはしいの、やれ告發するのなんの吐かしやがるさ。淅と結局をつけはつけたが、大骨折らしアがつたね。此樣な先生が居るから馬鹿々々しく事が面倒になる。いや面倒と云ふと武男さんなぞが矢張此流で、實に話せないに困る。」



「千々岩はんは最早御歸りか？」

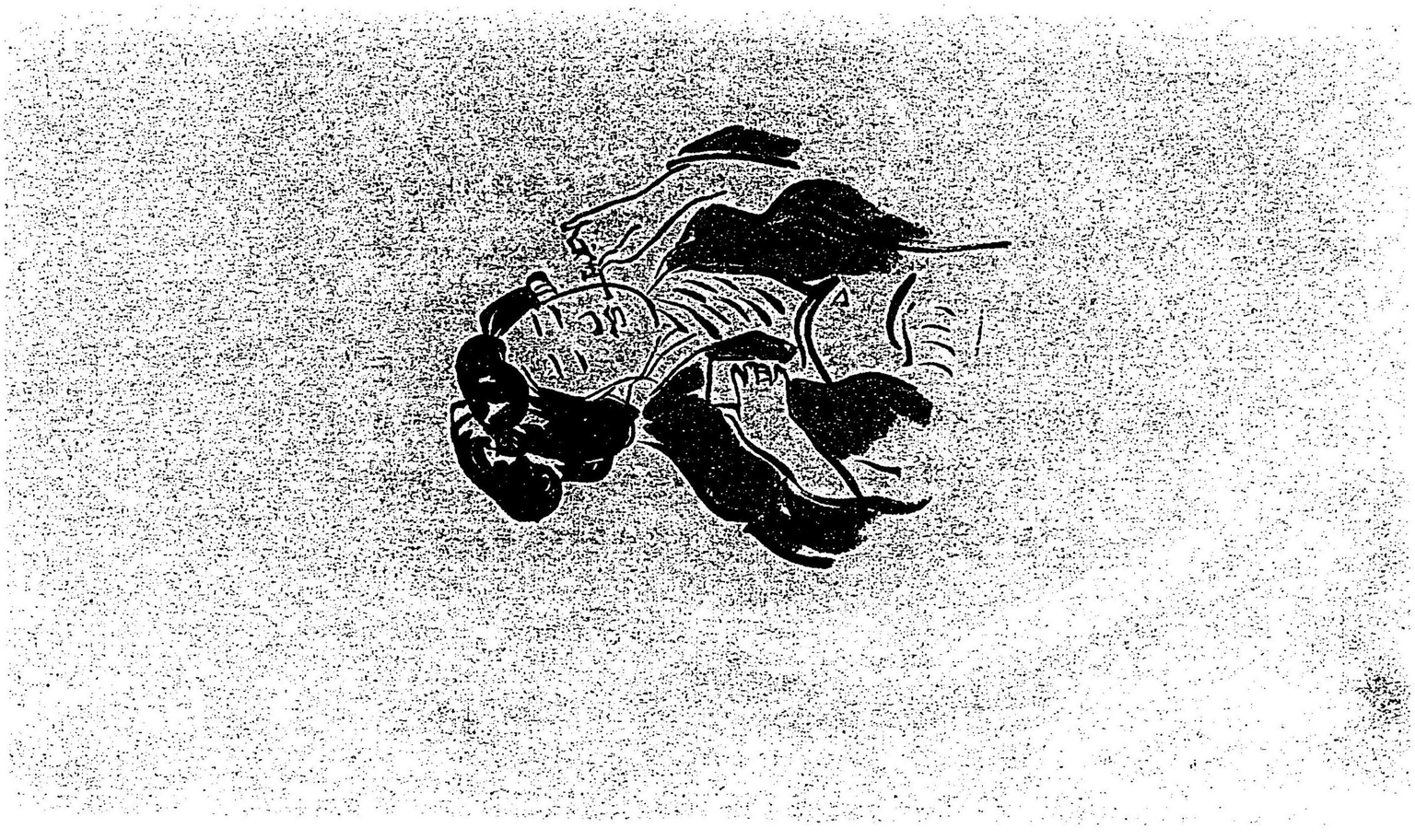
「今迄つ拂つた所だ。如何だい、型は？」

反對の女はいと顔を長くして「本當に良人。彼女にも困り切りますがな。――然、御身は彼方往つて御出。今日もな良人、些何かい氣に喰はんたら云ふて、御茶碗を投げたり、着物を裂いたりして、仕樣がありまへんやつた。本當に十八と云ふ年をして――」

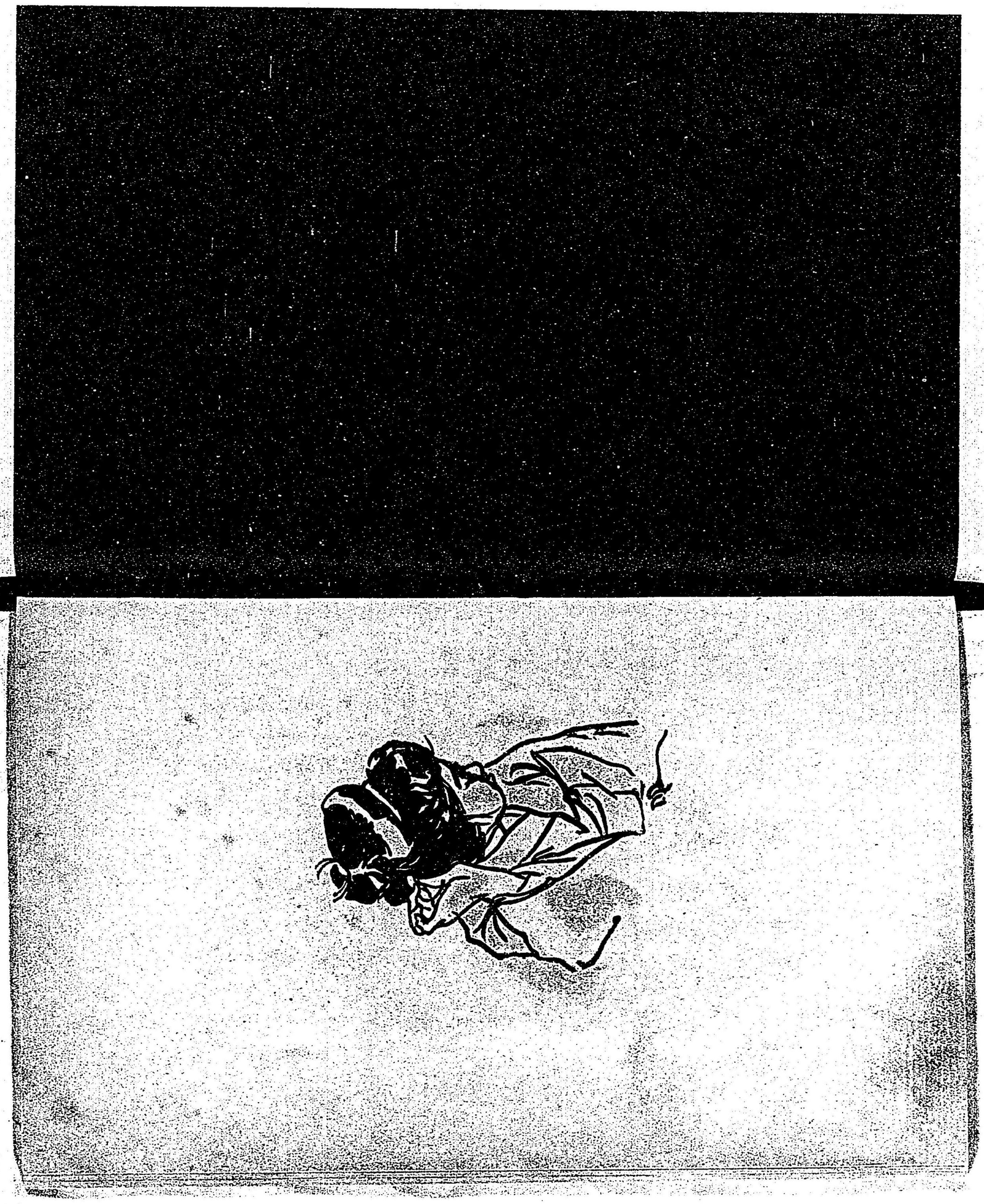
「全く以て巢鴨だね。困つた奴だ」

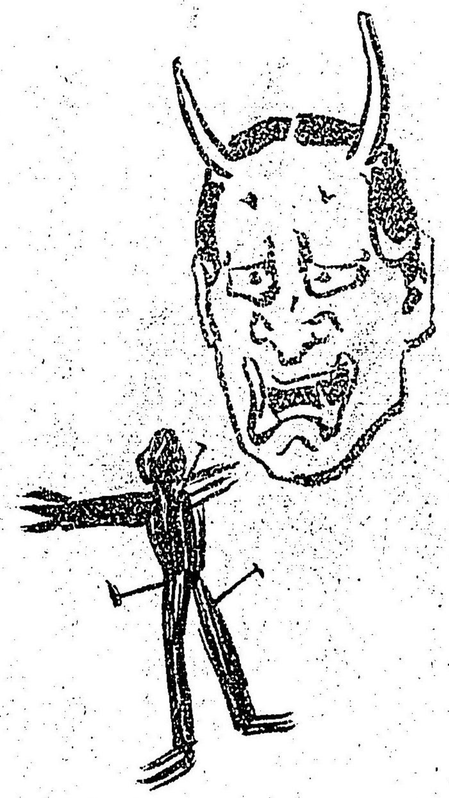
「良人、　北様な戯談所ぢやござんせんがな。――でも可愛想や、本當に可愛想や、今日もな、良人、竹に北様云ひましたてね。本當に情らしい武男はんや、ひどい〳〵〳〵人や、去年の御正月には紙下を編んであげたし、それからまた毛糸の手袋だの、腕ぬきだの、それ處か今年の御年始には赤い毛糸で襯衣まで編んであげたに、皆自腹ア切ッて編んであげたのに、何の沙汰なしで彼の不器量な意地悪の威張つた浪子はんを嫁に貰つたり、本當にひどい人だわ、ひどいわ〳〵〳〵、妾も山木の女やさかい、浪子はんなんかに負けるものか、本當にひどいひどい〳〵ッてな、良人、斯様に云つて泣いてな、其様に思ひ込んで居ますに、あゝあ、如何にかして遣りたいがな、良人」

床には琴、月琴、玻璃箱入りの大人形などを置きたり。一隅には美しき女机あり、此方には姿見鏡あり、如何なる高貴の姫君や住み玉ふらむと見てあれば、八畳の中央に絹布圏敷かせて、玉蜀黍の毛を束ねて結つた様なる島田を大童に振り亂し、ごろりと横に臥したる十七八の娘、色白の下豐と云へば可愛氣なれど、其下豐が少し過ぎて頬のあたりの肉今や落ちむかと危ぶまるゝに、ちよつぼりと開いた口は閉づるも面倒と云ひ貌に始終洞門を形づくり、薄すりとある か無きかの眉の下にありあまる肉を辛ふじて二三分上下に押分けつつ開きし眼の中如何にも春霞のかけたる如く、前の世からの長き眠りが頓斗今以て醒めぬ様なり。



今何か吩咐けられて笑を忍びて立つて行く女の背に、「馬鹿」と一つ後矢を射つけながら、女は自烈憤氣に掻巻踏ぬぎ、床の間にありし大形の――袴穿きたる女生徒の多くつれる為眞をとりて、糸の如き眼に瞬きもせず見つめしかやがて其一人の面と覺しきあたりを頬りに爪彈きしつ。酒其にも飽き足らでや、爪もて其の顔の上に縦横に疵をつけぬ。

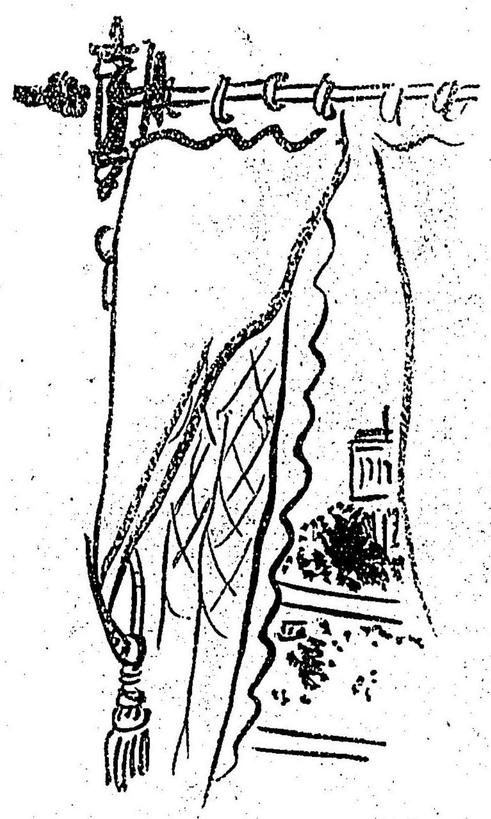




「如何だ、お豐、氣分は？些は宜か？今隱したのは何だい。一寸見せな、まあ見せな。此れさ見せなと云へば。――何だ、此ア、浪子さんの顏ちやないか、ひどく爪痕をうけたぢやないか。此樣な事するよりか丑の時參でもした方が餘程氣が利いてるぜ」

赤坂氷川町なる片岡中將の邸内に栗の花咲く六月中旬の或土曜の午後、主人子爵片岡中將は小紋の單衣に鼠縮緬の兵兒帶して、揚乎と書齋の椅子に倚りぬ。

五十に間はなかる可し。額のあたり少し禿げ、兩鬢霜漸く繁からむとす。體量は二十二貫、亞剌比亞種の逸物も將軍の座下に汗すと云ふ。兩の肩怒りて頸を沒し、二重の顎直ちに胸につゞき、安祿山風の腹便々として、牛にも似たる太腿は行くに相擦れつ可し。顏色は思ひ切つて赭黑く、唇厚く、鬚薄く、眉も薄し。唯此體に似げなき兩眼細ふして光り和らがに、宛ながら象の眼に似たると、今にも笑まんする氣はひの斷えず口邊にさまよへるとは、云ふ可からざる愛嬌と滑稽の嗜味をば著しく描き出しぬ。



或年の秋の事とか、中將微服して山里に獵り暮らし、姥獨り住む山小屋に澁茶一碗所望しけるに、姥つく〴〵と中將の樣子を見て、

「大々的體格だのう。兎の一疋も獲れたんべいか？」

中將莞爾として「些も獲れない」

「其樣な殺生したあて、あにが商賣になるもんかよ。其體格で日備取でもして見ろよ、五十兩は大丈夫だよ」

「月にかい？」

「あに！年によ。惡いこたあ云はねえだから、日備取るだあよ。何時だあて此婆が世話あしてやる」

「應、其は難有い。また頼みに來るかも知れん」

「其樣しろよ、其樣しろよ。其大々的體格で殺生は惜いこんだ」

此は中將の知己の間に一つ話として今も時々出る佳話なりとか。

何處にか、車井の響珂々と珠を轉ばす樣に聞えしが、また已みぬ。

午後の靜寂は一邸に滿ちたり。

忽ち虚を覘ふ二人の曲者あり。尺ばかり透きし扉より窃と頭をさし入れて、また引き込めつ。忍笑の聲は戸の外に渦まきぬ。一人の曲者は八ばかりの男兒なり。膝ぎりの水兵の服を着て、編上げ靴をはきたり。一人の曲者は五か、六なる可し、紫矢絣の單衣に紅の帶して、髪ははらりと眼の上まで散らせり。

二人の曲者は暫し戸外に踟躕ひしが、今は地へ兼ねたる樣に四の手齊しく扉を排きて、一齊に突貫し、室の中程に横はりし新聞綴込の堡壘を難なく乘り越え、眞一文字に中將の椅子に攻め寄せて、水兵は右、振分髪は左、小山の如き中將の膝を生捕り、

「阿爺！」

「御免下さい」

と入つて來しは四十五六とも見ゆる品好き婦人、眼病ましきにや、水色の眼鏡をかけたり。顏の何處となく伊香保の三階に見し人に似たりと思ふも其筈なる可し。此は片岡中將の先妻の姉清子とて、貴族院議員子爵加藤俊明氏の夫人、媒妁として浪子を川島家に嫁しつるも此夫婦なりけるなり。

中將は莞爾に起ちて椅子を薦め、椅子に向へる窓の帷を少し引き立てながら、

「さあ、何卒。非常に御無沙汰をしました。御主人ぢや相變らず御忙しいでせうな。はゝゝゝ」

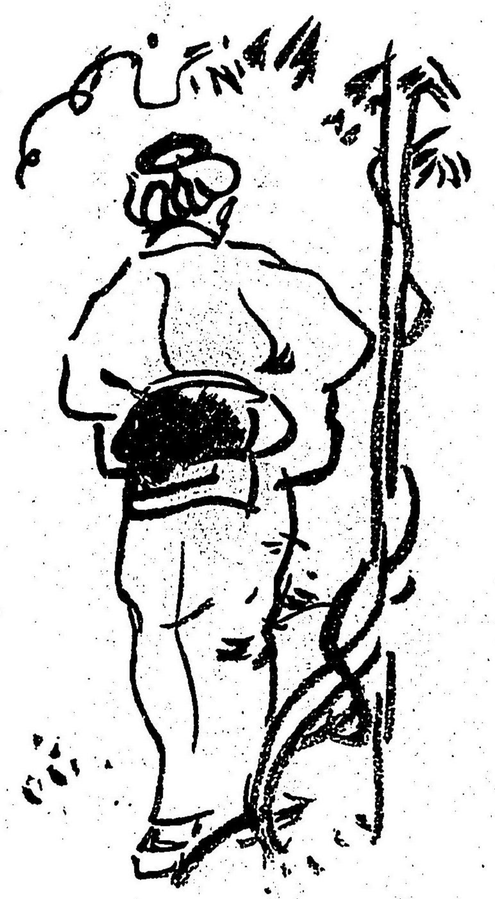
「恰度駝師でね、水鉄は放しませんよ。ほゝゝゝ。まだ菖蒲には早いのですが、自慢の朝鮮柘榴が花盛りで、薔薇もまだ殘つてますから何卒御愛めに來て下さいまして、ね、吳々申しましたよ。ほゝゝゝ」

紅のリボンのお駒と云ふは、今年十五にて、此も先妻の腹なりしが、夫人は姉の浪子を疎めるに引易へてお駒を愛しぬ。寡言にして何事も内氣なる浪子を、意地悪き拗ね者とのみ思ひ誤まりし夫人は、姉に比してやゝ俠なる妹の己が氣質に似たるを喜び、一は姉へのあてつけに、一はまた継子として愛せぬものかと世間に見せたき心もありて、父の愛の姉に注げるに對しておのづから味方を妹に求めぬ。

＊　＊　＊

東側の椽の、二つ目の窓の陰に身を側めて、聞き居れば、時々腹より押出した様な父の笑聲、嘲とした伯母の笑ひ聲、かはる〳〵聞えしが、後には話聲の漸く低音になりて、「姑」「浪さん」などの途切れ途切れに聞ゆるに、紅リボンの少女はいよゝ耳傾けて聞き居たり。

「あのね、阿母、よくは分からなかッたけども、何だか幾の事ですわ」
「さう？幾」
「あのね、川島の老母がね、僂麻質斯で肩が痛むでね、それで近頃は大層氣むづかしいのですと。其にね、幾が姉さんにね、姉さんの御部屋でね、あの、奥様、此方の御隱居様は如何して彼様に御癇癪が出のでムいませう、本當に奥様御辛うムいますねエ、でも御年寄の事ですから、どうせ永い事ぢやムいません、てね、其様に云ひましたとさ。本當に馬鹿ですよ、幾はねエ、阿母」
「何處に行つても好事はしないよ、困つた婆ぢやないかねエ」
「それからねエ、阿母、恰其時椽側を老母が通つてね、悉皆聞いてしまッて、それは〳〵ひどく怒つてね」
「罰だよ！」



武男が母は、名をお慶と云ひて今年五十三、時々僂麻質斯の起れど、其外は無病息災、麹町上二番町の邸より亡夫の眠る品川東海寺まで徒歩の往來容易なりと云ふ。體量は十九貫、公侯伯子男爵の女性を通じて、體格にかけては圓脇は確との評あり。併し其肥大も實は五六年前夫通武の病歿したる後の事にて、其以前は瘠ぎすの色蒼ざめて、病人の樣なりしと云ふ。されば壓搾られし護謨球の手を離されてぶく〳〵と膨れ上る類にやと云ふ者もありき。

悧巧な様でも十八の花嫁、全然違ひし家風の中に突然入り込みては流石事毎に惑へるも無理にはあらじ。然れども浪子は父の訓戒此處ぞと、己を抑へて何も家風に從はむと決心の臍を固めつ、其決心を試むる機會は須臾に來りぬ。

伊香保より歸りて程なく、武男は遠洋航海に赴きつ。軍人の妻となる身は、留守勝は覺悟の上なれど、新婚間もなき別離はいとゞ腸を斷ちて、其當座は手中の玉をとられし様にほと〳〵何も手につかざりし。

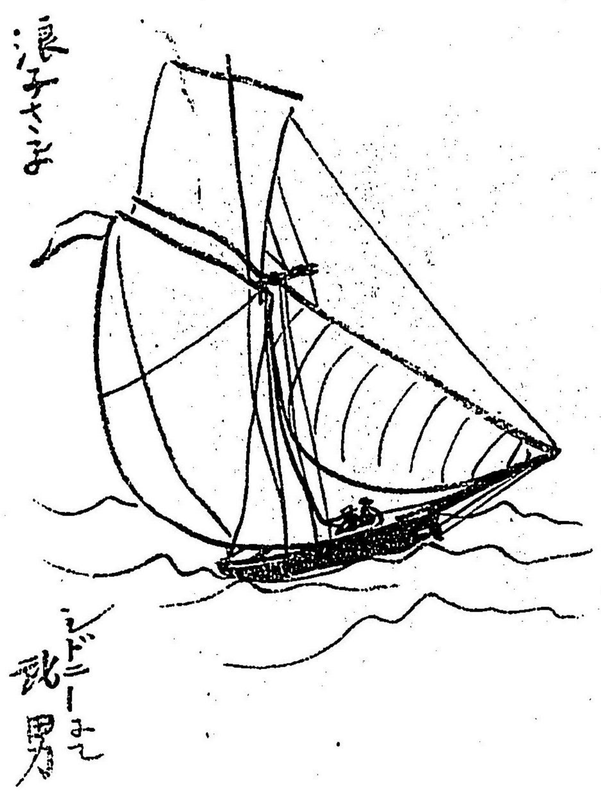
「それ〳〵其狂は四寸にして斯う返へして、イヽエ其樣ぢやありません、此方寄しなさい、二十歳にもなッて、お嫁さまもよく出來た、へゝゝゝ」と冷笑ふ聲から眼つき、吾も二十の花嫁の時丁度其樣して叱られしが、あゝ吾れながら恐ろしいとはッと思つて改むる程の姑はまだ上の上、眼にて眼を償ひ、齒にて齒を償ひ、所謂江戸の姑の其敵を長崎の嫁で討つて、識らず知らず平均を吾一代の中に求むるもの少からぬが世の中。浪子の姑もまた其一人なりき。

西洋流の繼母に鍛はれて、今また昔風の姑に鍊らるゝ浪子。病める老人の用繁く嫁を呼ばるゝ故、強て「妾が致しませう」と引取つて馴れぬことゝて意に滿たぬことあれば、此方には禮を言ひてわざと召使の者を例の大音聲に叱り飛さるゝ其聲は、十年が程も繼母の雄辯冷語を聞き盡したる耳にも今更の樣に聞えぬ。其も初め暫しが程にて、後には癇癪の鋒直接に吾身に向ふ樣になりつゝ。

部屋に歸つて机の上の銀の寫眞掛にかゝつた逞しき海軍士官の面影を見ては、嬉しさ戀しさなつかしさのむら〳〵と込み上げて、密と手にとり、喰ひ入る樣に眺めつめ、接吻し、頬ずりして、今其處に其人の居る樣に「早く歸ッて頂戴」と囁きつ。良人の爲には如何なる辛抱も樂しと思ひて、吾を捨てゝ姑に事へぬ。

……獨り縁橋の上に立つ時は、何とも云ひ難き感が起りて、浪さんの姿が眼さきに閃閃致し（女々しと笑ひ玉ふな）候。同僚の前では遮莫家郷思遊征と吟じて平然に澄まして居れど、（笑ひ玉ふな）浪さんの寫眞は始終或人の内衣嚢に潜み居り候。今此手紙を書く時も、宅の彼六疊の部屋の芭蕉の蔭の机に頬杖つきて此手紙を讀む人の面影が直ぐ其處に見え候（中略）

シドニー港内には夫婦、家族、他人交へずヨットに乘りて遊ぶ者多し。他日功成り名遂げて小生も浪さんも白髮の爺姥になる時は、豈啻ヨットのみならんや、五千噸位の汽船を一艘拵へ、小生が船長となつて、子供や孫を乘組員として世界巡航を企て可申候。其節は此のシドニーにも來て、何十年前血氣盛の海軍少尉の夢を白髮の浪さんに話し可申候（下略）。



……の遣る瀬なく早く〳〵御眼にかゝり度翼あらば御側に飛んでも行き度く存じ〳〵事も有之夜毎日毎に取り出でゝは眺め入り〳〵萬國地理など學校に寫眞とにて御艦の側に致し候ものゝ近頃は鉛筆にいはとて何御艦の此邊をや過ぎさせ玉はん明日は明後日は今更氣なく寫眞を迚り居〳〵あゝ男に生れしなら水兵とも吾れとめ御つき申さんをなどあらぬ事まで心に浮ぶ眼もとり申さ身始終御地圖今日は御日々物思ひに沈み〳〵是迄何心なく吾て叱御側離れ上を氣豫報など今在すあたりは此外と知り〳〵なる警戒し新聞の天氣は實に〳〵御尊體を風邪大切に……（下文略）

浪より

「御獵の品かい、此は澤山に――御馳走が出來るの」
「なんですよ、阿母、今度は非常の大獵だつたさうで、つい大晦日の晩に歸りなすつたさうです。丁度今日は持たして遣らうとして御出の所でした。まだ明日は猪が來るさうで――」
「猪？――猪が捕れ申したか。たしかわたしの方が三歳上ちやつたの、浪どん。昔から元氣の好え方ちやつたがの」
「其は何ですよ、阿母、非常の元氣で、今度も二日も三日も山に焚火をして露宿しなすつたさうですがね。まだ中々若い者に負けん積りちやて、其樣威張つて居なさいます」
「其樣ちやろの、阿母のごと倭麻質斯が起つちや最早仕方があいません。人間は病氣が一番不好もんぢや。」

若夫婦は打連れて、居間へ通りつ。小間使を相手に、浪子は良人の洋服を脱がせ、流球袖の綿入二枚重ねしをふわりと打被すれば、武男は無造作に白縮緬の兵兒帯尻高に引結び、やをら安樂椅子に倚り ぬ。洋服の塵を拂ひて次の間の衣桁にかけ、「紅茶を入れる樣にしてお置き」と小間使に吩咐けて、浪子は良人の居間に入りつ。

「良人、御疲れ遊ばしたでせう」

葉巻の青き煙を吹きつゝ、今日到來せし年賀狀名刺など見てありし武男はふり仰ぎて、

「浪さんこそ草臥れたらう、――おゝ奇麗」

「？」

「美しい花嫁樣と云ふ事さ」

「まあ、嫌――彼樣な言を」

さと顔打赫めて、洋燈の光眩しげに、眼を瞬したる、富には蒼きまで白き顔色の、今ぼうつと櫻色に匂ひて、艶々とした丸髷宛ながら鋭と照りつ。浪に千鳥の裾模様、黒繻に白茶七糸の丸帶、碧玉を刻みし勿忘草の襟どめ、（此たび武男が米國より持て來りしなり）四分の差六分の笑を含みて、嫣然として燈光の中に立つ姿を、吾妻ながら妙じと武男は思へるなり。

「本當に浪さんが斯樣着物を更へて居ると、未だ昨日來た花嫁の樣に思ふよ」

「彼樣な言を――其樣なことを仰有ると往つてしまひますから」

「はゝゝゝ最早言はない〳〵。其樣逃げんでも宜いぢやないか」

「ほゝゝ、一寸着更を致して參りますよ」

主人が年若く粗豪なるに似もやらず、凡案整然として、隅々に到るまで一塵の座を留めず、剣へ古銅瓶に早咲の梅一両枝趣深く活けたるは、温かき心と細かなる注意と熟練なる手と常に此室に往來するを示しぬ。實に其主は銅瓶の下に梅花の香を浴びて、心臓形の銀の寫眞掛の中に含笑めるなり。ランプの光は隈なく室の隅々までも照らして、火桶の炭火は緑の絨氈の上に紫がかりし紅の焔を吐きぬ。

愉快と云ふ愉快は世に數あれど、恙なく長の旅より歸りて旅衣を平生服の着心地よきに更へ、窓外に吼ふる夜あらしの音を聞きつゝ居間の煖爐に足さしのべて、聞き馴れし時計の軋々を聞くは、完き愉快の一なるべし。況んやまた阿母老健にして、新妻の更に愛しきあるをや。葉卷の香しきを吸ひ、陶然として身を安樂椅子の安きに托したる武男は、今まさに此樂を享けゝるなり。

「何有――今日は實に愉快だつたね、浪さん。阿貝の御話が面白いものだから、嫌な酒までつい過してしまつた。はゝゝゝ、本當に浪さんは良い阿爺を有つて居るね、浪さん」

浪子は莞爾、ちらと武男の顔を眺めて

「その上に――」

「エ？何です？」と驚き顔に武男はわざと眼を瞪りつ。

「存じません、ほゝゝゝ」さと顔赧らめ、俯きて指環を捻る。

「いや此は大變、浪さん、何時其樣に御世辭が上手になつたのかい。此では禁どめ位は厳いもんだ。はゝゝゝ」

……武男は崖道を上り、明竹の小藪を廻り、常春藤の蔭に立つ四阿を見て、暫し腰を下ろせる時、

「其れだから三千圓は拂つた、また訴訟なぞしないと云つて居るぢやないか。――山木、君の事ぢやない、控へて居玉へ、――其はしない、併し最早今日限り絶交だ」

最早事斯に到りては恐るゝ所なしと度胸を据ゑし千々岩は、再び態度を嘲罵にかへつ。

「絶交？――別に悲しくもないが――」

武男の眼は焔の如く閃めきつ。

「絶交はされても構はんが、金は出して貰ふと云ふのか。腰拔漢！」

「何？」

氣色立つ双方の勢に醉も幾許か醒めし山木は溜まり兼ねて二人が間に分け入り「若旦那も、千々岩君も、ま、ま、ま、靜かに、靜かに、其れぢや話も何も分からん、――此れさ御待ちなさい、ま、ま、ま、御待ちなさい」と頻りに彼方を縋ひ此方を繕ふ。

啞然として言ひ放ちつゝ武男は膝の前なる證書をとつて寸々に引裂き棄てつ。突と立ち上つて次の間に出でし勢に、先刻より此處に隠れて聞き居りしと覺しき女お豐を煽り倒しつ。「あれえ」と云ふ聲をあとに足音荒く玄關の方へ出去りたり。

呆氣にとられし山木は千々岩と顏見あはしつ。「相變らずの坊ちやまですな。併し千々岩さん、絶交料三千圓は隨分好い儲をしたね」

落ち散りたる證書の片々を見つめ、千々岩は默然として緊と唇を嚙みぬ。

二月初旬不圓引きこみし風邪の、一たびは癒りしを、或夜姑の胴着を仕上ぐるとて急ぐまに夜更かしゝより再びひき返へして、今日二月めの十五日と云ふに浪子はいまだ床あぐるまで快よきを覺えざるなり。

ドシ〳〵と縁に重やかなる足音して、矮き仁王の影障子を傳ひ來つ。

「氣分は如何ごあんすな？」

と枕頭に坐るは姑なり。

「今日は大層宜うムいます。起きられるのですけども――」と編物を措き、襟の亂を繕いつゝ、起き上らむとするを、姑は押とめ、

「其、其が不可ん、其が不可ん。他人ちやなし、遠慮が入ッものか。其、其、其、また編物しなはるな。不可ぞ。病人な養生が仕事、喃浪どん。和女は武男が事ちふと、何も角も忘れッちまいなはる。いけません。早う養生してな――」

「本當に濟みません。寢むでばかし……」

「其、其が他人行儀、喃。わたしは其が大嫌ぢや」

口には笑へど、眼は鋼様はざる色を帶びて、出で行く姑の後影、

「御免遊ばせ」

と起き直りつゝ見送りて、浪子は胸がに吐息を漏しぬ。

親が子を始むと云ふこと、ある可しとは思はれねど、浪子は良人の歸りし以來、一種異なる關係の姑との間に湧き出でたるを覺えつ。

遠洋航海より歸り來て、浪子の狂せしを見たる武男が、粗暴なる男心にも留守の心遣を汲みて、いよ〳〵傷るをば、聊苦々しく姑の思へる樣子は、怜悧き浪子の眼を遁れず。時には彼孝——姑の所謂——と此愛の道と、一時に踏み難く岐るゝことあるを、浪子は窃に思ひ惱めるなり。

「斯樣に寢て居ると、ね、色々な事を考へるの。ほゝゝゝ、笑つちや嫌よ。此れから何年かたつてね、何處か外國と戰爭が起るでせう、日本が勝つでせう、其樣するとね、お千鶴さん宅の兄さんが外務大臣で、先方へ乘込んで媾和の談判をなさるでせう、其れから武男が艦隊の司令長官で、何十艘と云ふ軍艦を向ふの港に列べてね……」

「其れから赤坂の叔父さんが軍司令官で、宅の阿爺が貴族院で何億萬圓の軍事費を議決さして……」

「其樣すると妾はお千鶴さんと赤十字の旗でも樹てゝ出かけるわ」

「でも身體が孱弱ちや出來ないわ。ほゝゝゝ」

「おほゝゝゝ」

笑ふ下より浪子は忽ち咳嗽を發して、右の胸をおさへつ。

「餘り話したからいけないのでせう。胸が痛むの？」

「時々咳嗽するとね、此處に響いて仕樣がないの」

失望、不平、鉄拳さまく〳〵の怨、功名の道に於ける蹉跌の恨、の悪感は中將と浪子と武男を繞りて煙の如く立ち上りつゝ、彼の霜に吾冷頭を訪り、情に無して數字を忘るゝの愚を笑へる千々岩も、連敗の餘の流石に氣は亂れ心狂ひて、一腔の怨毒何れに向るてか吐き盡す可き路を得ずば、自己――千々岩安彦が五尺の軀先づ破れ了らむずる心地せるなり。

復讐、復讐、世に心よきは悪くしと思ふ人の血を啜つて、其の頬の一滴に舌鼓うつ時の感なるべし。復讐、復讐、あゝ如何にして復讐す可き、如何にして怨み重なる片岡川島南家を微塵に吹き飛ばす可き地雷火坑を發見し、成る可く自己は危險なき距離より糸をひきて、惜しと思ふ輩の心傷れ腸裂け骨摧け腦塗れ生きながら死ぬ光景を眺めつゝ、快よく一盃を過さむか。此は一月以來夜となく日となく千々岩の頭を往來せる問題なりき。

梅花雪とこぼるゝ三月中旬、或日千々岩は親しく往來せる舊同窓生の何某が第三師團より東京に轉じ來るを迎ふるとて、新橋に赴きつ。待合室を出るとて、恰も十五六の少女を連れし丈高き婦人――貴婦人の婦人待合室より出で來るにはたと行き逢ひたり。

＊　＊　＊

「――今日は何方へか？」

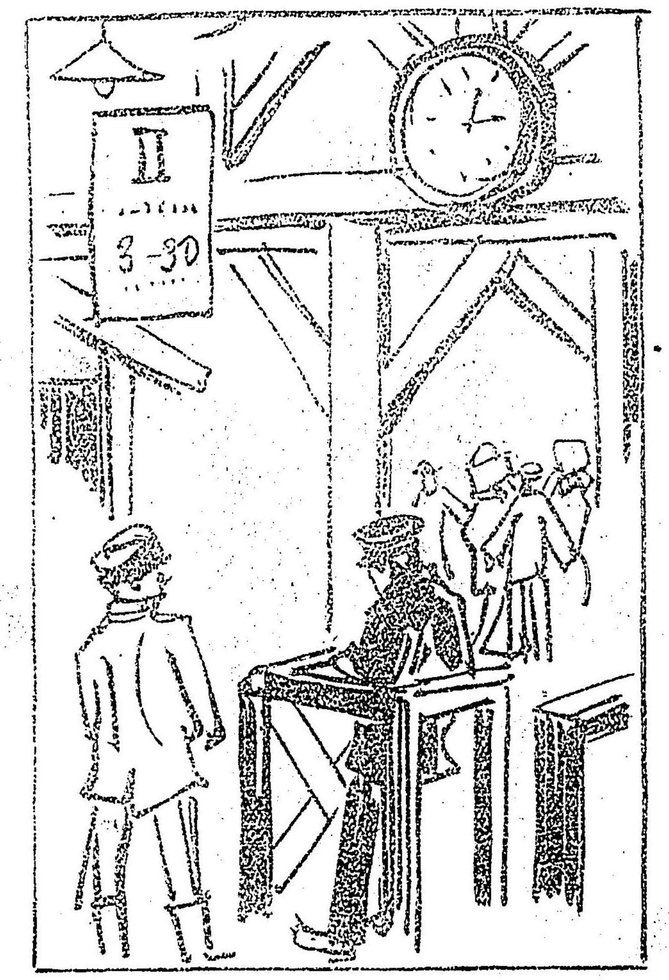
「は、一寸逗子まで――貴君は？」

「何、一寸朋友を迎へに參つたのですが――逗子は御保養でムいますか」

「おや、まだ御存じないのでしたね、――病人が出來ましてね」

「御病人？　何人で？」

「浪子です」



「それは――何ですか、餘程御悪いので？」
「はあ、到頭肺になりましてね」
「肺？――結核？」
「は、ひどく喀血をしましてね、其でつい先日逗子へ參りました。今日は一寸見舞に」云ひつゝ千々岩が手より四季袋を受取り「では左様なら、直ぐ歸ります、些御遊に入らつしやいよ」
華美なるカシミールの肩掛と紅のリボンかけし垂髪と遥に上等室に消ゆるを目送して、歩を返へす時、千々岩の唇には恐ろしき微笑を浮べたり。

醫師が見舞ふ毎に、敢て口には云はねど、其症候の次第に著るしくなり來るを認めつゝ、術を盡して防ぎ止めむとせし甲斐もなく、目には見えねど浪子の病は日に募りて、三月の初旬には、疑ふ可くもあらぬ肺結核の初期に入りぬ。

ふ　頭がと　に　まか　瓦黒な　の　脚に
同じ袈裟ふ　て　、　ゝり　園が風ら　真ま結ら
時にり　ら　折ゐに　し　を　吹ーけ　黒く　様で
に、　し　〈　庭か　で　遊ぶ　ぬ　。　き　！
解な　る　ら　久ぶ　り　白く　。　を　泥ら
何ゐ　加ぶと　き　館へし　思ま過ま　雨ら　今ま　間々々
庭に　わ　く　近ぶり　く　ひ　ま　遊ま　は　遊ま　め　た
と　紅な　て　く　て　打ま　出ま　な　し　る　の　心ま　野の
も　な　、　く居ま　濡し居ま　来ま　ま　る　真ま　じ　こ　原に
な　に　紅な　の　し　王ま　王ま　三ま　月ま　思ま　中ま　ど　そ　に
く　を　の　し　ひ　じ　月ま　の　ま　に　沈ま　泥ま　鶯ま
遊ま　吐ま　濡ま　て　し　絵ま　の　よ　に　立ま　歌ま　泥ま　鶯ま
に　け　眼ま　、　良ま　花ま　き　の　立ま　歌ま　泥ま　鶯ま
け　眼ま　、　良ま　花ま　き　の　立ま　歌ま　泥ま　鶯ま
吾ま　る　面ま　彼ま　人ま　の　自ま　ア　て　る　日ま　や　し　り　立ま
の　る　面ま　彼ま　人ま　の　自ま　ア　て　る　日ま　や　し　り　立ま
影ま　泥ま　時ま　淵ま　と　ま　ひ　今ま　庭ま　に　る　波ま　子に　若ま　旅ま
影ま　泥ま　時ま　淵ま　と　ま　ひ　今ま　庭ま　に　る　波ま　子に　若ま　旅ま
を　泥ま　時ま　、　ま　で　、　阿ま　日ま　に　に　心ま　は　く　し　ま　の
を　泥ま　時ま　、　ま　で　、　阿ま　日ま　に　に　心ま　は　く　し　ま　の
見ま　に　ば　し　吾ま　し　句ま　の　に　も　鶯ま　ま　で　、　庭ま　の
見ま　に　ば　し　吾ま　し　句ま　の　に　も　鶯ま　ま　で　、　庭ま　の
し　か　。　知ま　に　、　深ま　星ま　ま　る　一　を　、　病ま　上ま
し　か　。　知ま　に　、　深ま　星ま　ま　る　一　を　、　病ま　上ま
「　あ　す　か　俄ま　き　の　り　蝶ま　時ま　雷ま　を
「　あ　す　か　俄ま　き　の　り　蝶ま　時ま　雷ま　を
町ま　紅ま　花ま　秋ま　て　の　し　鳴ま　待ま　迫ま
町ま　紅ま　花ま　秋ま　て　の　し　鳴ま　待ま　迫ま
到ま　に　横ま　瓶ま　秋ま　加ま　て　り　ち　り
到ま　に　横ま　瓶ま　秋ま　加ま　て　り　ち　り
頭ま　叩ま　胸ま　の　に　よ　何ま　月ま　忘ま　波ま　淋ま
頭ま　叩ま　胸ま　の　に　よ　何ま　月ま　忘ま　波ま　淋ま
一　び　先ま　枝ま　折ま　く　に　く　心　子に　夕ま
一　び　先ま　枝ま　折ま　く　に　く　心　子に　夕ま
て　、　苦ま　を　き　鶯ま　風ま　ら　の　立ま
て　、　苦ま　を　き　鶯ま　風ま　ら　の　立ま
し　折ま　む　ふ　ま　雨ま　め　の　き　心ま　雲ま
し　折ま　む　ふ　ま　雨ま　め　の　き　心ま　雲ま
と　思ま　脚ま　く　る　料ま　る　じ　の　き　心ま　雲ま

あゝ死！以前世を辛らしと見し頃は、生何の樂ぞ死何の哀惜ぞと思ひし折りもありけるが、今は人の生命の愛ければ猶吾命の惜まれて千代までも生きたしと思ふ浪子、情けなしと思ふ程、病に勝たむの心も切に、をり〳〵沈む吾氣をふり起しては、己より醫師を促すまでに怠らず病を養へるなりき。

眼と鼻の横須賀に恰も在勤せる武男が、閑を偷みてしば〳〵往來するさへあるに、父の書、叔母、千鶴子の見舞頻間なく、別莊には、去年の夏川島家を追はれし以來絶えて久しき彼姥のいくが、其の再會の緣山となれるが爲めに病其ものゝ悲む可きをも喜ばんずるまで浪子をなつかしめるありて、能ふ可くば以前に倍する熱心もて伏侍するあり。まめ〳〵しき老僕が心を用ゐて事ふるあり。

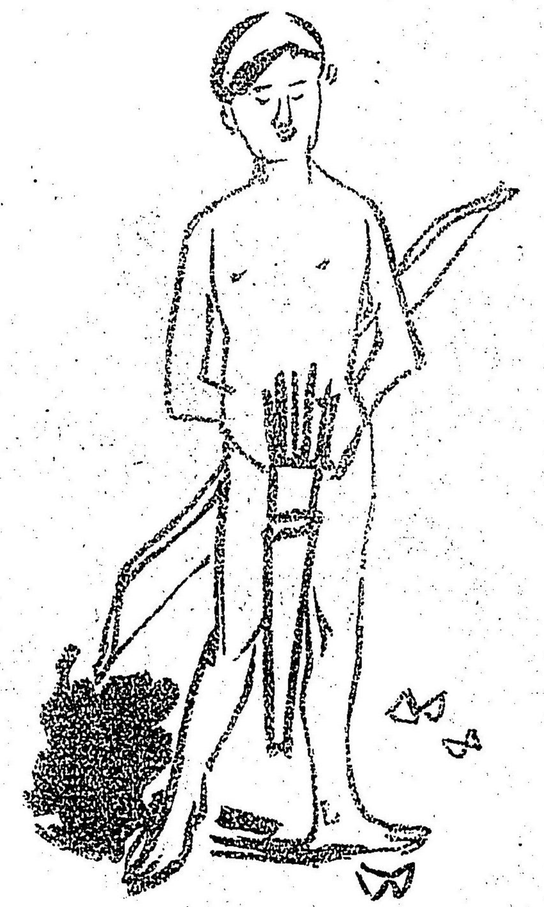
「何て、もうしてこんまに早く死ぬんじゃろ私！14年も生きたりゆ。」

春寒厳しき都門を去りて、身を暖かき湘南の空氣に投じたる浪子は、日に自然の人を慈しめる温光を吸ひ、身を繞る暖かき人の情を吸ひて、氣も心も自づから舒やかになりつ。地を轉じて既に二旬を經たれば、喀血止み咳嗽やゝ減り、一週二回東京より來り診する醫師も快しと云ふまでには到らねど病の進まざるを甲斐ありと喜びて、此上烈しき心神の刺戟を避け、安靜にして療養の功を續げなば、快復の望ありと許すに到りぬ。

部の花はまだ少し早けれど、逗子あたりは若葉の山に山櫻咲き初めて、山又山にさりもあへぬ白雲をかけし四月初の土曜、今日は朝よりそぼ降る春雨に、海も山も一色に打煙り、たゞさへ永き日の果もなきまで永き心地せしが、日暮方より大降りになりて、風さへ強く吹き出で、戸障子の鳴る響凄まじく、怒り哮る相模灘の濤聲、萬馬の跳るが如く、海村戸を鎖して燈火一つ漏る家もあらず。

片岡家の別墅にては、今日は夙く來可かりしに勤務上已み難き要ありておくれし武男が、夜に入りて、風雨の暗を衝きつゝ來りしが、今は已に衣を更め、晩餐を終へ、卓に倚りかゝりて、手紙を讀みて居り。相對ひて、浪子は美しき巾着を縫ひつゝ、時々針をとゞめて良人の方打眺めては笑み、風雨の音に耳傾けては靜かに思に沈みて居り。

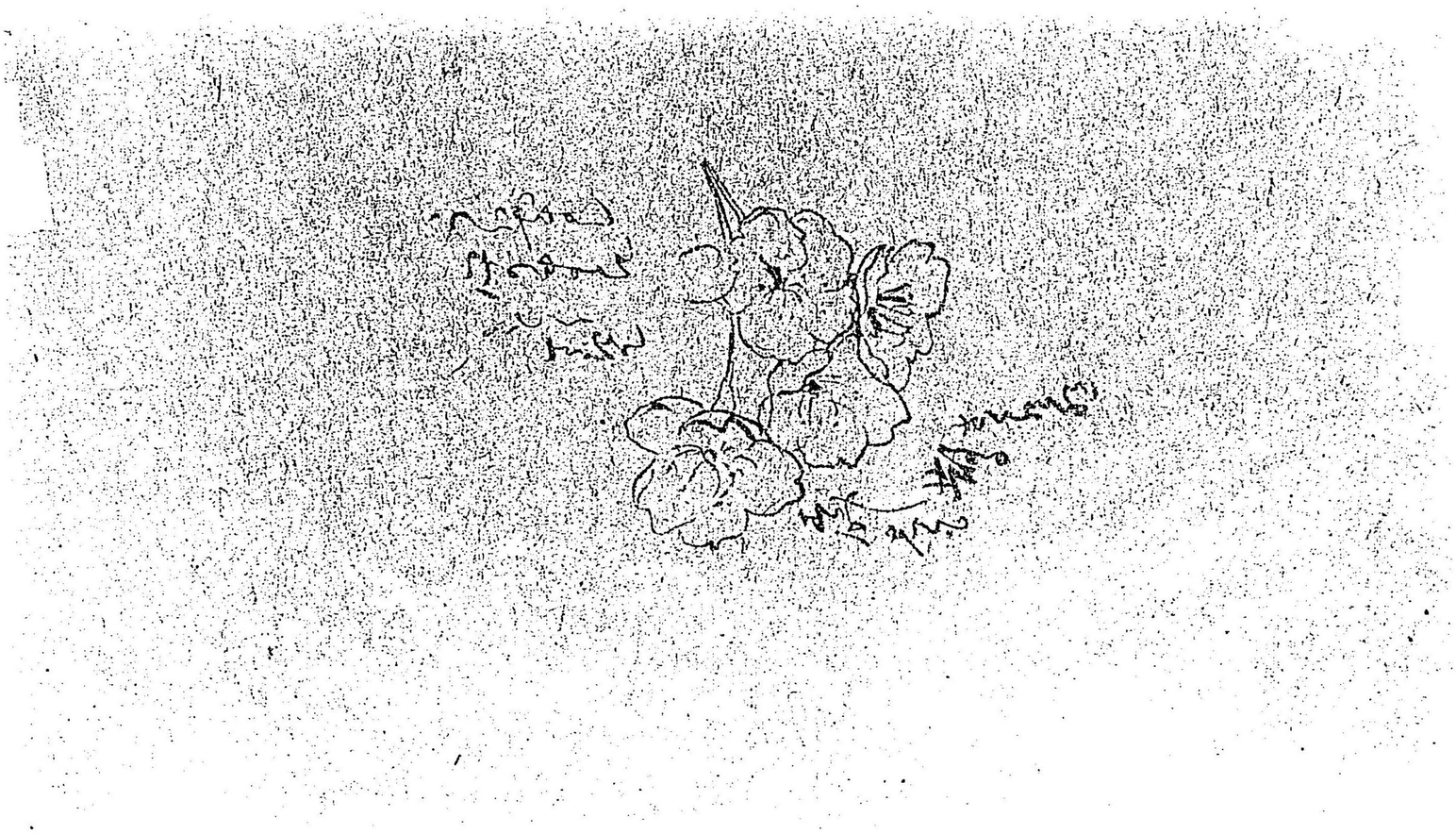
揚卷に結ひし綠の髮には、一朶の山櫻を葉ながらに挿みたり。

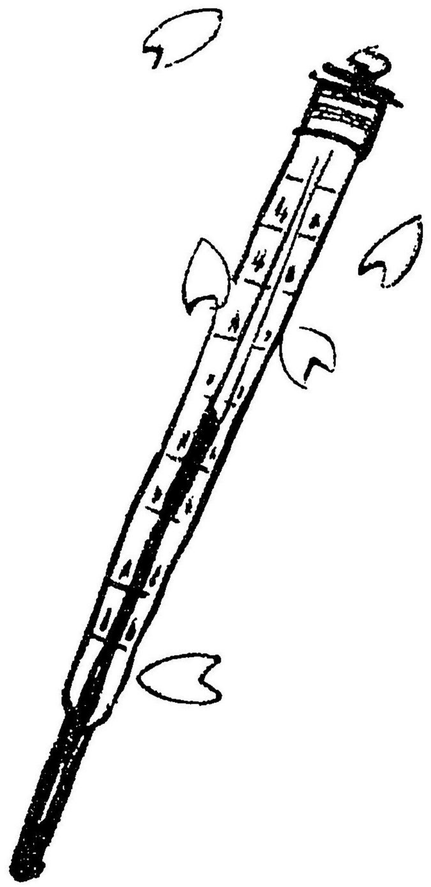


二人の間には、一脚の卓ありて、桃色の蓋かけしランプは蠟々と燃えつゝ、薄紅の光を落し、其傍には白磁瓶に挿みたる一枝の山櫻、雪の如く默して語らず。今朝別れ來し故山の春を夢むるなる可し。風雨の聲屋を繞りて騷がし。

浪子は磁瓶に挿しゝ櫻の花瓣を輕く撫でつゝ「今朝老爺が山から折つて來ましたの。奇麗でせう。――でもう。本當に如何して此樣に潔いものでせう！左樣々々、先刻蓮月の歌に此樣のがありましたよ。『うらやましく心のまゝにとく咲きて、すが〳〵しくも散るさくらかな』よく詠んでありますのねエ」

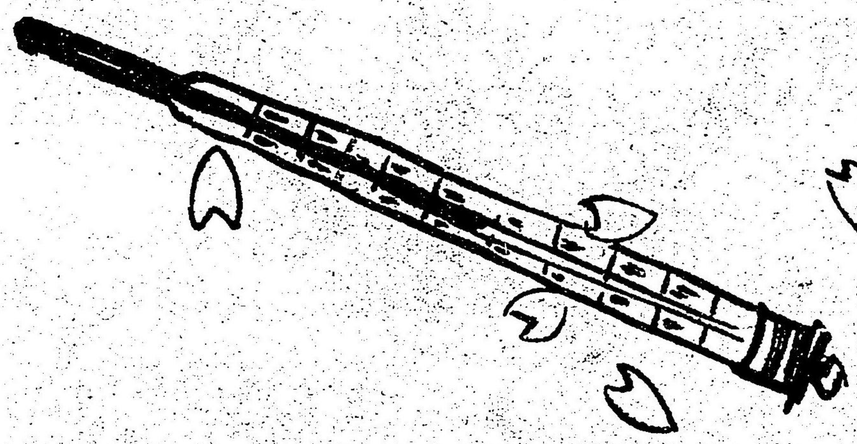
「なに？すが〳〵しくも散る？僕――乃公は其樣思ふがね、花でも何でも日本人はあまり散るのを賞翫するが、其も潔白で宜いが、過ぎると宜くないね。戰爭でも早く討死する方が負だよ。今少し剛情に、執拗さ、氣永な方を奬勵したいと思ふね。其で吾輩――乃公は斯樣な歌を詠むだ。いゝかね。皮切だから何せ可笑しいよ、しつこしと、笑つちやいかん、しつこしと人はいへども八重櫻盛りながきは嬉しかりけり、はゝゝゝ梁本跳足だらう」





浪子は挾み居し體溫器を一寸燈火に透し見て、今宵は常よりも上らぬ熱を手柄顔に良人に示しつゝ、筒に收め、暫らく圓卓の櫻花を見るともなく眺めて居たりしが、忽ち含笑みて：

……。



「最早一年經ちますのねエ、よゥく記憶へてますよ、彼時馬車に乘つて出ると家内の者が送つて出てますから何とか云ひたかつたのですけど如何しても口に出ませんの、おほゝゝ。其れから溜池橋を渡ると最早日が暮れて、十五夜でせうか、眞丸な月が出て、それから山王の彼の坂を上ると恰櫻花の盛りで、馬車の窓からはらはら〳〵まるで吹雪の樣に降り込んで來ましてね、ほゝゝ。膝に花片が……。

武男は圓卓に頬杖つき「一年位たつな早いもんだ、彼此すると直ぐ銀婚式になつちまうよ。はゝゝゝ、彼時浪さんの澄し方と云つたらはッはゝゝ思ひ出しても可笑しい、可笑しい。如何して彼樣澄されるかな」

「でも、ほゝゝゝ——貴郎も若殿樣できちんと澄してらッしたわ。ほゝゝゝ手が震へて、盃が如何しても持てなかつたンですもの。」

そゝやお前に見取れたからだ　まゝたく

「大分御賑やかでムいますねエ」といくは莞爾笑みつゝ鐵瓶を持ちて再び入り來つ。「姥も此樣に氣分が清々致したとはありませんでムいますよ。御一處に斯樣して居りますと、昨年伊香保に居た時の樣な心地が致し」ますでムいますよ」

「伊香保は嬉しかつたわ！」

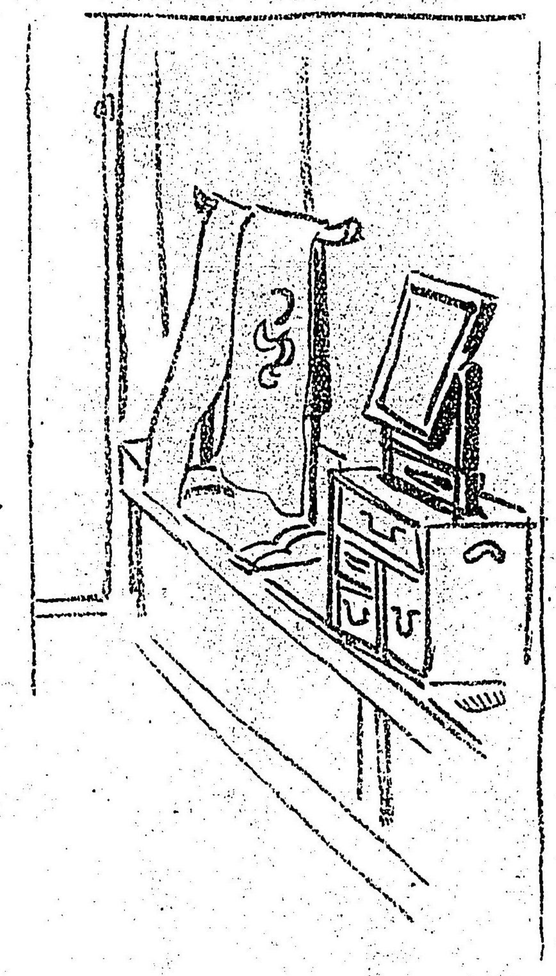
「炭狩は如何だい、誰かさんの御足が大分重かッたつけ」

「でも貴郎が餘り御急ぎなさるんですもの」と浪子は含笑む。

「最早直ぐ炭の時候になるね。浪さん、早く全快なッて、また炭狩の競爭しようぢやないか」

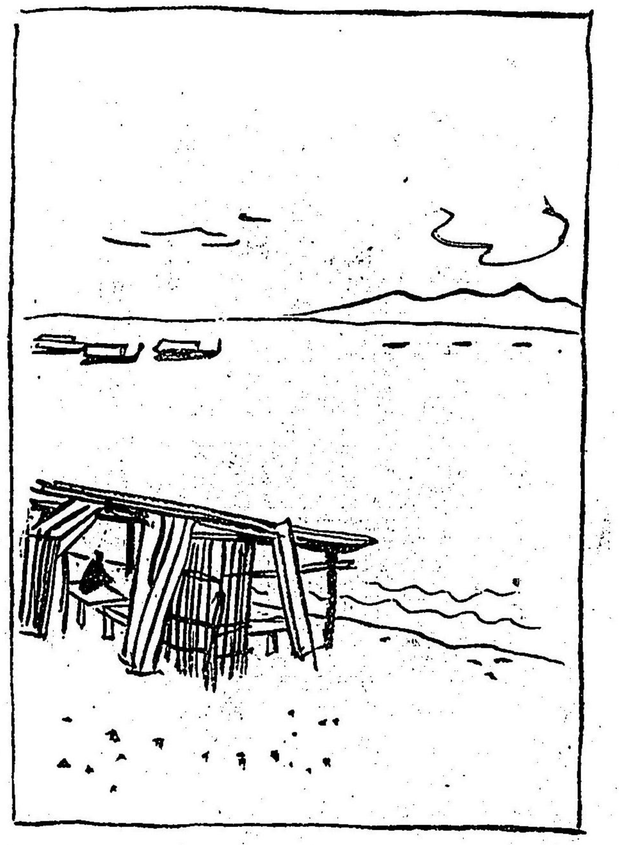
「ほゝゝ、其迄には屹度癒りますよ」ねをゆゝと

あ〜



明くる日は、昨夜の暴風雨に引かへて、不思議な程の上天氣。

錦京は午後と定めて、午前の暖かく風なき間を運動にと、武男は浪子と打連れて、別莊の裏口よりはら〳〵松の砂丘を過ぎ、濱に出でたり。



「好お天氣、斯樣にならうとは思ひませんでしたねエ」

「實に好天氣だ。伊豆が近く見えるぢやないか、話でも出來さうだ」

二人は已に乾ける砂を踏みて、今日の凪を地曳すと立ち騷ぐ漁師、貝拾ふ子等を後にし、新月形の濱を次第に人少なき方に歩みつ。

「不動まで行きませう、ね――イヽエ些も疲れはしませんの。西洋迄でも行けるわ」

「宜いかい、其れぢや其肩掛を御遣りな。岩が滑るよ、さ、しつかりつかまつて」

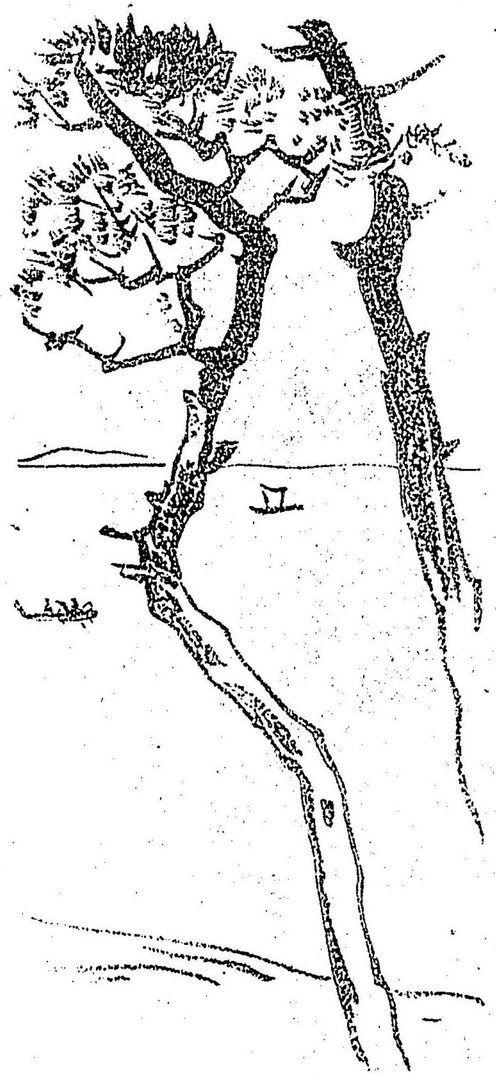
武男は浪子を扶け引きて、山の根の岩を傳へる一條の細逕を、しばしば立ちどまりては憩ひつゝ、一丁あまり行きて、しやら〳〵瀧の下に到りつ。瀧の横手に小さき不動堂あり。松五六本、ひよろ〳〵と崖より秀でゝ、斜めに海を覗けり。

武男は岩を掃ひ、肩掛を敷きて浪子を憩はし、自己も腰かけて、吾膝を抱きつ。「好い風だね！」

「良人！」
「何？」
「癒りませうか」
「エ？」
「わたくしの病氣」
「何を云ふのかい。癒らずに如何する。癒るよ、屹度癒るよ」
浪子は良人の肩に倚りつ、「でも萬一したら癒らずにしまひはせんか」
と、其樣時々思ひますの。實母も此病氣で亡なりましたし――」
「浪さん、何故今日に限つて其樣な事を云ふのかい。必定癒る。癒る――
と醫師も云ぢやアないか。ねエ浪さん、其樣ぢやないか……。」

＊　＊　＊

二人は暫し默して語らず。江の島の方より出で來りし白帆一つ、海面を滑り行く。節面白き歌乃、水を渡りてほのかに聞ゆ。



浪子は涙に曇る眼に微笑を帯びて「癒ります
わ、屹度癒りますわ。――あゝあ、人間は何
故死ぬのでせう！生きたいわ！千年も萬年も
生きたいわ！死ぬなら二人でねエ、二人で！」
「浪さんが亡なれば、僕も生きちや居らん！」

武男は涙を揮りはらひつゝ、浪子の黒髪をかい撫で

「あゝもう斯樣な話は止うぢやないか。早く養生して、よくなッて、ねエ浪さん、二人で長生して、金婚式をしようぢやないか」

浪子は良人の手を韡と兩手に握りしめ、身を投げかけて、熱き涙をはら〳〵と武男が膝に落しつゝ「死んでも、わたしは良人の妻ですわ！誰が如何したッて、病氣したッて、死んだッて、未來の未來の後までわたしは良人の妻ですわ！」

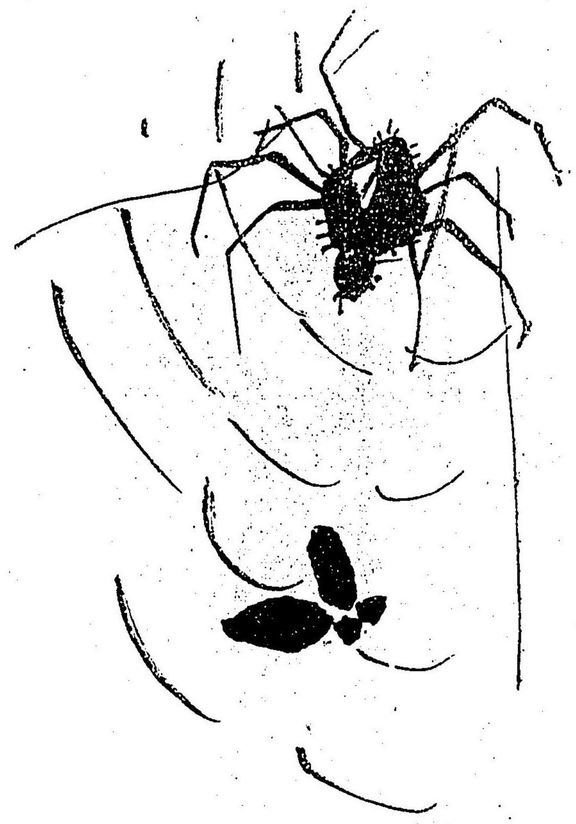
「其様ぢやて。わたしも其が恐ろしかで、逗子に行くな〳〵て、武に云ふんぢやがの、矢張聞かんで、見なさい――」

手紙をとりて示しつゝ「醫者が如何の、やれ看護婦が如何したの、――馬鹿が、妻の事ばかい」

千々岩はにやり笑ひつ。「でも叔母様、其は無理ですよ、夫婦に仲の好過ぎると云ふことはないものです。病氣であつて見ると、武男君もいよ〳〵此ら其様ある可きぢやありませんか」

「其ぢやてゝ、妻が病氣すッから親に不孝をすッ法は無もんぢや」

千々岩は慨然として嘆息し「いや實に困つた事ですな、折角武男君も好い細君が出來て、叔母様もやつと御安心なさると、直ぐ此様な事になつて――併し川島家の存亡は實に今ですね……。



冷たくなりし茶を啜りつゝ、母は少し震ひ聲に「武どん、卿酔つちや居まいの、分かん風するのかい？」熟と吾子の顔見つめ「わたしが云ふのはな。浪を――實家に戻すのぢや」

「戻す？……戻す？――離縁ですな!!」

「こーれ、聲が高かぢやなッか、武どん」寒戦ふ武男を熟と見て

「離縁、左様ぢや、まあ離縁よ」

「離縁！離縁!!――何故ですか」

「何故？先刻から云ふ通り、病氣が病氣ぢやからの」

「肺病だから……離縁すると仰有るのですな？浪を離縁すると」

「左様よ、可愛想ぢやがの――」

「離縁!!!」

武男の手より滑り落ちたる葉巻は火鉢に落ちて夥しくうち煙りぬ。一燈蠟々と燃へて、夜の雨はら〳〵と窓をうつ。

「まだ義理人情を云ふッか。卿は親よか妻が大事なッか。たわけ奴が。何云ふと、妻、妻、妻ばかい云ふ、親を如何すッか。何をしても浪ばッかい云ふ。不孝者奴が。勘當すッど」

武男は唇を嚙みて熱涙を絞りつゝ「阿母、其は除りです」

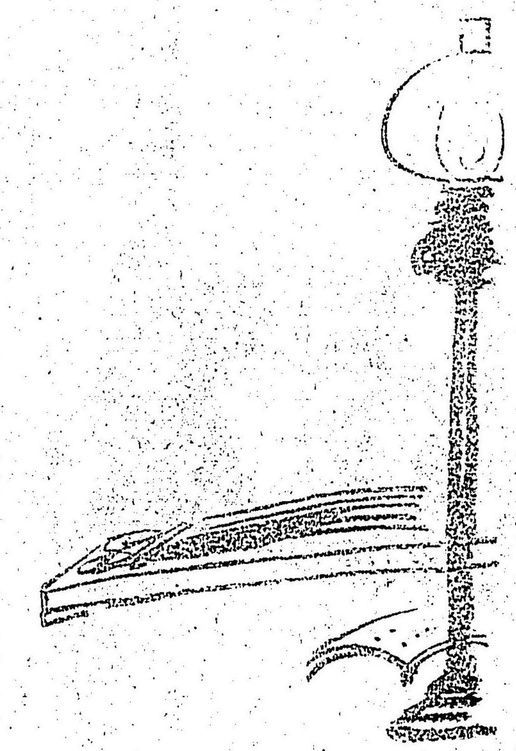
「何が除だ」

「私は決して其樣な粗略な心は決して持つちゃ居ないです。阿母に其心が屆きませんか」

「其ならわたしが云ふ言を何故聽かぬ？エ？何故浪を離緣センッか」

「併し其は――」

「併しもねもンぢゃ。さ、武男、妻が大事か、親が大事か。エ？家が大事？浪が――？――エヽ馬鹿奴」

汽車を下れば、日落ちて五日の月薄紫の空にかゝりぬ。野川の橋を渡りて、一路の沙はほの聞き松の林に入りつ。林を穿ちて、枯桙の黒く夕空に聳ゆるを望める時、思ひがけなき爪音聞ゆ。「あゝ琴を彈いて居る……」と思へば心の臓を拷らるゝ心地して、武男は暫し門外に涙を拭ひぬ。

今日は常よりも快よかりしとて、浪子は良人を待ちかてに絶えて久しき琴取り出でゝ奏しなりき。